
たとえこの身が矛盾していても……

ディアボロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たとえこの身が矛盾していても……

【Nコード】

N7868S

【作者名】

ディアボロ

【あらすじ】

この物語は、めだかボックスの二次元創作となっております。そして、この小説には、かなりの矛盾が生じるかもしれませんが、嫌な人はブラウザをそっと閉じて、回れ右して帰ってください。処女作品なんで、お手柔らかにお願いします。主人公最強設定のチート野郎です。転生とかはありません。IFの話です。暇つぶし程度に書いてみようかなと思ったので、更新は超不定期になるかもしれませんのであしからず……。球磨川可愛いよ球磨川。

第0話（前書き）

どもつす、作者のディアボロです。

こんな駄作を開いてくださってありがとうございます。

本編始まります。

第0話

ある商人が言った。

この矛はどんな物でも貫けると……。

そして、その商人が、今度は違うところでもこう言った。

この盾はどんな物も防ぐと。

そして、その商人の話をつままたま聞いていた人が居た。その人間は商人にこう尋ねた。

ではその何でも貫ける矛で、そのどんな物も防ぐ盾を攻撃したらどうなるのか？

商人は困り顔で口を閉じてしまった……これが矛盾と言う言葉の由来。

では……俺は？

「……俺はここに居るけど、ここには居ない……」

これも立派な矛盾だ。俺はここに居るのに、まるで俺が居ないかのよように、周りに居る人間は俺をすり抜ける。

「俺はここには居ないけど、ここに居る……」

「あれ？そついや、あいつ今日は学校来てないな？」

「確かにそつだな。まあ、いつものずる休みだろ？あいつ、中2辺りからあんまり学校来てないって聞くし」

そつ……みんなには見えないのか……まあ良いか。でも、この異常アブノーマルは酷いな……これ、やろうと思えば過負荷マイナスだって出来るんだよな。

「……さて、誰も気づいてくれないし、帰ろうか……」

俺は教室から出て、そのまま姿を眩ます。

……暇だなおい。

第0話（後書き）

……短いね……

第一話 流石めだかつち（前書き）

章の挿入に失敗しました……どうしよう……。

軽く凹んでる自分が居ます……。

とりあえず、本編始まりませう。

第一話 流石めだかつち

『世界は平凡か？』

平凡ですね！。

『未来は退屈か？』

未来が退屈なら、ここに居る生徒の何人が未来に夢を持ってないんだか……。

『現実には適当か？』

現実ほど適当な物はないと思いますけどね。

『安心しろ、それでも生きることには劇的だ！』

ひっははは。もし劇的なら、俺なんてこんな捻くれてませんで。

『そんなわけで本日よりこの私が貴様達の生徒会長だ！学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい』

いやー、痛い、聞いてられないわ。でも聞いちゃう。

「24時間365日、私は誰からの相談でも受け付ける！！」

それはすごい。でも、休みの日とかはどないせいと。めだかつちの家にでも行けっか？あ、どうやら終わったようだ。

「……さて、暇だし不知火抱きしめに行こうつと」

みんななんか移動しちゃってるしさ。いやー、それにしても、めだかつちの話は相変わらず上から目線だニヤー。

そんなわけで、一年一組に着いたようだ。はてさて、愛しの不知火はーつと……。

「しっかしあのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ！人前に立つのに慣れてるつつつかさー」

「カツ！」

「「ありやあ人の前に立つのに慣れてんじゃねーよ。人の上に立つのに慣れてんだ！」」

「……でしょ？善ちゃん」

「うわっ！？盾道！？」

「あ、やほー、盾道ー」

「し・ら・ぬ・いー！」

ギユムツ。

「もー、私の体は安くないよー？」

「それでは、後でご飯でも奢ってあげよう」

「流石盾道！わかってるー！」

俺は不知火を抱きしめながら話を進める。周りの視線なんて気にならない。というか、みんなには僕が不知火に抱き着いてる所は『見えている』けど『見えていない』。

「んでー、善ちゃんはめだかつちに着いてくのー？YOU、生徒会に入っちゃいなよー」

「カツ！なわけねーだろ！これ以上あいつに振り回されてたまるかつてのー！」

そう言いながら善ちゃんは立ち上がり、指をビシッ！と指しながら。

「俺は絶対！生徒会には入らないー！」

.....。

「善ちゃん、後ろ後ろ」

「？」

ガシッ！

「まあ、そうつれないことを言つものではないぞ善吉」

「！？」

めだかつちが後ろで善ちゃんと同じポーズをとつた後、善ちゃんの頭を後ろからガシッと掴んだ。ご愁傷様だね、善ちゃん。

「やほー、めだかつちー」

「おお、盾道ではないか。どうだ？貴様も生徒会に入るか？」

「いやはや、あたしは生徒会には興味ないデスよ？きゃはは、残念無念、またいつか。って事で、僕はこれから不知火とデートなので

」

ガシッ！

「貴様もそうつれないことを言つものではないぞ。では、行こう」

俺もめだかつちに捕まりました……どうしましょう……。あ、そうだった。

「不知火ー、とりあえずお金あげるから好きな物食べてくると良いよー」

「やったー！ありがとうございます盾道！」

僕は不知火に財布ごと渡して、そのままめだかつちに連行される。不知火に使ってもらえるのなら、お金も本望だろう。

さて……。

「善ちゃん……」

「盾道……」

「……ギヤアアアアアアアア！」「」

とりあえず、善ちゃんと一緒に悲鳴を上げとく。これは、何とも嫌

な予感しかしませんことよ……。

（生徒会室）

「……つたく、普通に連れてくることができねーのかよ。生徒会長さん」

「右に同じく……」

「ふん。私の誘いをすげなくしつづける貴様らが悪い。それに、よそよそし呼び方をするものではないぞ。昔のようにめだかちゃんと呼ぶがよい！」

「めだかっちー、ウチ帰っても良いですかー？」

「却下だ、盾道。それと、一人称はコロコロ変えるものではないぞ？」

「あたしは縛られるのが嫌いでーす」

だから生徒会とか入りたく無いん德斯けどね……いやー、帰りたい。物凄く帰りたいわー……。

「ってめだかつち!? 何脱いどるんですか!？」

「あつ、当たり前みてえに人の後ろで着替えてんじゃねえよ! お前はもっと恥じらいという概念を持って!」

「私と貴様らの間に恥じらいなど何の意味がある? 特に善吉。少なくとも小6まで私と一緒に風呂に入っていた男の言うことではないな」

「昔の話だ!！」

「え、善ちゃん……。昔めだかつちとくんづぼぐれつ……」

「違つわ!」

善ちゃんの激しい突っ込みを受け流しながら、俺はこの生徒会室から逃げる体制を取る。このままだとめだかつちに流されて生徒会に入りそうになりそうだし。早めに逃げておいた方がよさそうだ。

「あ、善ちゃん。俺今日ジャンプ買いに行かないといけないから帰るわ」

「まて！逃げるな盾道！」

「君は僕に『触れるが』『触れない』」

スカッ！

「あっ、くそ！」

「ふっふふーん では、俺は帰りますねー」

今の僕には誰も触れれない。たとえそれがめだかつちでも、僕の異常アブノーマルには干渉できない。これが僕の異常アブノーマル。

「盾道！もし生徒会に入りたくなったら、いつでも私の所に来てくれ！！」

是が非でもご勘弁願いたいのですが……。さて、帰ると見せかけてあの二人の行動でも観察しようかな。

「ふっふっふーん。これは箱庭学園が荒れるぞー。いや、荒れはしな
いか……。ま、どっちでも良いかー」

はてさて、一体どんな楽しい出来事が動き出す事か。

第一話 流石めだかつち（後書き）

……なんか意味不明ですなこれ

まあ、もちつとまとめられる様努力しますです

では、また

設定

ほこがわたてみち
矛川盾道

服装と特徴

服装は至って普通の着方。顔はイケメンでは無く、女顔。髪は日によって変わっている。ポニーテールにしたり、ツインにしたり。上げてたりしている。

アブノーマル
異常

『矛盾』

自分の言葉にした事を矛盾化する事が出来る。例えば攻撃を受けた時の場合は。

僕は攻撃を『受けたが』『受けていない』よって、ダメージは無い。だとか、僕の攻撃は『当たってないけど』『当たった』など。

言葉を無理やり矛盾させてしまう異常。
アブノーマル

だから、新しい能力とかも作れてしまっし、あるものを無いものとして扱えるし、逆もまた然り。

この能力は異常でもあるが過負荷マイナスでもある。

だから、人格が破綻とまではいかないけど、口調が統一しなかったり、キャラが変わったりする。

矛盾で作った能力は、本編で出た時に次の章の前書きか、出た章の後書きに説明を書きますので。

では、ノシ。

第二話 剣道か……面がマーンに聞こえるのは僕だけ？（前書き）

タイトルは気にしないでください

では、本編始まります

第二話 剣道か……面がマーンに聞こえるのは僕だけ？

「あれあれ？どうして剣道場に何か行ってるんだ？」

外で善ちゃんとめだかつちを待ち伏せして居たら、二人はなぜか剣道場がある場所まで移動している。大方、誰かが剣道場に溜まりまくっている不良を何とかしてほしいって目安箱に手紙を入れた輩が居るんだろっな。

「……それで、盾道。いつまで私達の後ろをつけているつもりだ？」

ありゃま、さっすがめだかつち、ちょっとwkkkkし過ぎて異常アブノーマルが弱まっちゃったか。でも、善ちゃんには気づかれてないし、ま、いっつか

「良く分かったねめだかつち」

「うわっ！？居たのかよ盾道!？」

「気づいていなかったのか善吉？」

「気づけるかよ！」

「まあ善ちゃんはどうでも良いや。んで、どうして剣道場に向かっているのかな？」

「……どうして剣道場に向かっていると分かる」

「ここら辺は特に部活動や委員会活動が多い訳でもないし。めだかつちや善ちゃんが学校の探索する訳ないしね。それに、この近くにある剣道場は不良の溜まり場になってるって聞いてたから、大方誰かが目安箱にその不良をどうにかしてほしい的な手紙が入っていたに違いない。つうかめだかつちの格好からして分かりますね、ありがとうございます……どや？」

俺は名推理を掲げて、二人を見る。善ちゃんは少し驚いた顔をしているが、めだかつちは分かっていたかの様な顔をしている。

「ふむ、流石は盾道だ。全部正解だ」

「やたー、んじゃご褒美に善ちゃんもらって良い？」

「良いぞ」

「お前らは何言ってるんだ！」

「冗談だ、そう怒るな善吉」

「ハモるな！」

「さて、剣道場に行きますか！」

「何故盾道が仕切るのが分からないが、その方が良いな」

「スルーかよorz」

なんか善ちゃんがドンマイな感じに凹んでいますなー。まあ、僕がやっただけどねー。に、しても……。

「大きい道場だなー」

あれから少し歩いた所に、こんな大きな道場があるとか。箱庭学園、どっだけ金掛けるのやら……でも、嫌いじゃないわー！！

「さて、それじゃ、どうやって入るかだな」

「？何を言ってるのだ善吉。もちろん正面突破に決まっているだろ」

「はあ……そう言っと思ってたよ！カツ！少しは緊張感とか無いのかよ！」

確かにねー。いまから不良の溜まり場に行くというのに。普通の人なら絶対行かないだろうし。もし行かなければならない理由とかがあっても、正面突破はあり得ないだろうね。

でも、めだかつちだし。常識は通用しないしねー。

ガラガラ。

などと思っていたら、いつの間にか僕達は剣道場のドアを開けて中に入っていた。あれ？時間が数秒消し飛んだ？おいつ！何処かにボスが居るぞ！なんちって。

「あ？誰だアお前ら」

「どーもー！毎度お馴染みちり紙交換です 新聞や雑誌をくれると、トイレットペーパーとお取替えしますよー」

バキッ！

「ぜ……善ちゃん……ッッ……乙……」

「まったく、真面目にやらないか。一年十三組、生徒会執行部会長職黒神めだかだ。目安箱への投書に基づき、生徒会を執行する！」

「あー、聞いてんぜ。今をときめくイカれた新会長つて奴だろ？」

男はそう言いながら立ち上がり、めだかっちに木刀を向けながら、また口を開く。

「こんなところにお出でになるとは驚きだな！支持率98%か何だか知らねーが、生憎、俺らは残りの2%の方だぜ！！」

「貴様がリーダーの門司三年生だな。剣道か、懐かしいぞ。私も昔少しだけかじったよ……。この木刀も良く手入れされておる。黒檀とは随分と張り込んだものだ」

「だねー。あれ？何かこっちの木刀には名前が彫ってある。……エクスカリバー……厨二病乙wwwwつか木刀にエクスカリバーw

WWWなんつーか、見ていて痛いWWW

僕とめだかつちは木刀を気づかれぬ様に取り、木刀をマジマジと見る。あ、僕は後ろにいる不良Bから取りました。まあ、めだかつちは無刀取りしたんだろうね。僕のはひ・み・つ

「かつ、困めおめーら!!」

『おっ、おう!!』

「わー困まれた困まれた」

「……制服改造に染髪、装飾。校則違反のオンパレードだな。まあ、私もあまり人の事は言えんがな」

そう言つてめだかつちは足を前に出し、動き出す。その瞬間。めだかつちは何人にも分身したかのように縦横無尽に現れる。

『何イイイ!?!』

キュッ!

「それでも煙草だけは控えておけ。貴様達の健全な成長を阻害するし、何より将来の楽しみがなくなるぞ！」

「あたしはライター取つといたよ！」

「え……俺の煙草とライター!？」

「な……何だ今の!？」

「忍法か!？」

節子、それ忍法ちゃう、剣道や……。まあ、知ったところで先輩たちが出来るわけないしね!。それにしても、どうやって煙草とか手に入れてるんだろ？

「しかしまあ、荒れ放題だな。よくもここまで学園施設を荒廃させたものだ。逆に感心したくなる」

「なっ、何だよ!セツキョーかよ!」

「お呼びじゃねーんだよ会長さんよオ!」

「いい気になっえんじゃねーぞコラア!!」

あ、これは出るな。めだかつちの真骨頂が……。

「……哀れなことだ……」

『!?!?』

「貴様達もかつては真っ直ぐな剣道少年だったに決まっている。何か重大な理由があつて挫折を経験し、道を踏み外してしまったとしか考えられん」

そう、これが黒神めだかの真骨頂！上から目線性善説！

「親に見捨てられたか？よき師に出会えなかつたか？友に裏切られたか？安心しろ、私が貴様達を構成させてやる。剣のこと以外何も考えられないようにしてやる。矯正してやる強制してやる、改善してやる改造してやる」

めだかつちはイナバウアー？をしながら不良達に語りかける。つうか改造したら駄目だよ、めだかつち。不良さん、少しだけ君達に同

情するよ。

「二度とだらけようなどと思えぬよう、泣いたり笑ったりできなくしてやる」

それも駄目だよめだかつち。流石に喜怒哀楽くらいは残しといてやるうよそこは。

「先ずは素振り1000回からだ！貴様達、今日は歩いて帰れると思うなよ！！」

めだかつちは目をカツ！と見開く。おお、怖い怖い。でも、歩いて帰れなくなるって、どうやって帰れと？這いずれと？うっわ、めだかつち鬼畜う。

この日、不良どもの悲鳴が剣道場に響き渡った。俺は善ちゃんを生贄に捧げて、剣道場から退散させてもらった。だって、あの空気が絶対あたしもやらされる雰囲気だったもの。

「あゝ、ちかれた」

全く、めだかつちは極端だと思っのよね。でも、一緒に居て楽しいし、善ちゃんも面白いしね。さて、明日も楽しみだ。

第二話 剣道か……面がマーンに聞こえるのは僕だけ？（後書き）

はい、第二話でした

読んでくださり、ありがとうございます

第三話 改心しようとしてる人間の邪魔をする奴は、俺が許さない(前書き)

疲れた……やっと書き終わった

では、本編始まります

第三話 改心しようとしてる人間の邪魔をする奴は、俺が許さない

あ・ら・す・じ

『ギヤアアアアアア！！！』

「後素振り500回だ！頑張れ！」

「なんで俺もやらされてんだ！？」

と言うような感じで、めだかつちと善ちゃんが不良の溜まり場である剣道場に行き、不良どもを改心させに行きましたとさ。

～～食卓～～

「前から思ってたんだけどさー、人吉ってひよっとして頭悪くない？」

不知火がお昼を食べながら善ちゃんに言う。確かに善ちゃんはめだかつちに振り回されてばかりいるけど、馬鹿では……なくもないね。

「なんで毎回毎回お嬢様のシゴキに付き合ってるんだよ、部外者のくせに」

「うるせえ」

善ちゃん是不機嫌そうな顔（めっちゃ不機嫌）をして言葉を返す。顔、傷だらけやねー。善ちゃん可愛そうやわ。

「まあまあ不知火。善ちゃんがめだかつちに振り回されてるのはいつもの事なんだから。あんまり気にしちゃ駄目なんだニャー」

「それもそうだね」

「ほら不知火、また口の周り汚しちゃって。女の子なんだから、少しは身ぎれいにしないと」

フキフキ。

「ありがとう、盾道！」

「どづいたしましてなのだよ」

「ホントお前ら仲良いよなー」

「何々？妬いてるの善ちゃん？だったらあたしの愛情のベクトルを、今から少しだけでも善ちゃんに向けてあげようか？」

「カツ！野郎に愛情向けられても気色ワリイだけだっつもの！」

「まあこの子は！？僕の愛情が気色悪いですって！うう、どうしてこんな子になってしまったの！お母さん、悲しい！よよよ……」

「誰がお前の息子だ！」

あはは！やっぱり善ちゃんはツッコミ役に適任だなー。

「でもま、あいつのずれは昔からだからな。自分の優秀さに自覚がなくて、そのくせ周囲には自分と同じレベルを強要しやがる。だから、あいつには一生かかっててもわかんねーんだよ、努力が実らねー奴の気持ちとか。訳もなく凹んじまう奴の気持ちとかな」

「……悪いけど、善ちゃんってめだかつちと付き合い長いのに、案外何もわかってないね。『悪い奴やつつけてめでたしめでたし』めだかつちがそんな簡単な奴だったら、善ちゃんもそんなに苦労はし

ない筈だよ?」

そう。分からなければ、改心させるとか、改造してやるとかの発想は出ない筈。だったら倒してもう二度とここには来るなと脅せば、それで何とでもなる。

でも、そうしないで改心させようとするからこそ、もしかしたら人の何倍もその気持ちを、めだかつちは理解してるのかもしれない。ま、あれが素って事もあり得るけどね。

・・・

「冗談じゃない……めでたくなってなってもらわなきゃ困るんだよ……」

んっ?今誰か何か言わなかったかニヤツ?

「んん?今後ろに誰かいなかったか?」

どうやら善ちゃんも聞こえたようだ。良かった、俺だけが聞こえる霊的な何かじゃなくて。

「え?うん。同じクラスの日向がうどん食べてたよ」

「日向?」

「それがどうかした？」

「……いや、別に……」

良かった、僕だけに聞こえる霊的な何かじゃなくて……でも、どうして不知火と善ちゃんと同じクラスの日向君とやらが、そんな言葉を吐いたのだろうか……。

「あ、僕ちよつち用事思い出したから行くわ」

僕は二人にそう言って席を立ち、食堂から出ていく。んー、どっかの教室空いてないかな？……あ、あそこなら空いてるな。

〈十三組〉

いやー、初めて来ました十三組！登校するのは自由だから、誰も居ない。まあ、学校に来てる僕とめだかつちが稀なだけ何だけどね。

「さて、先ずは。ここにパソコンは『無い』けど『ある』」

その言葉を言った瞬間。僕の目の前に、一台のノートパソコンが現

れる。うん、いつも思うけど、やっぱりこの異常はチートだ。^{アブノーマル}

「さて、次に。日向の情報は、このパソコンでは『見えない』が見える」

よし……んっんと、何々………ほっほー………これはこれは、穏やかな情報じゃないな………だとすると、これは善ちゃんが危ないな………ん、仕方ない、友達の好だ、助けに行こう。

~~~~~

「………遅かったか………」

僕の目の前には、頭から血を流して倒れてる善ちゃんが居る。善ちゃんがやられるってことは、不意打ちかな？ここにちょうど曲がり角があるし。それに、善ちゃんが遅れを取る訳もないしね。

「善ちゃん、起きなさい」

俺は善ちゃんを軽く揺する。うめき声が聞こえたと言っことは、そこまで重症ではないと言っ事か……、なら安心だね。

「ん……ああ、盾……道か……」

「良かった、そんなに重症でもないんだね」

「……いや、一応頭から血イ流してるからな……」

「善ちゃんならそれ位大丈夫でしょ？へへへのかっぱじゃん」

「全く……」

うん、これならマジで善ちゃんなら平気そうだな。さて、少し借りを返さなくちゃいけないね……おイタをした子にはお仕置きを……くははは。

「善ちゃん、もしかして善ちゃんを殴ったのって日向君って子？」

「いや……流石に顔までは見てねえよ……」

「そう……分かった。ごめんね善ちゃん、保健室までは一人で行ってもらえるかな、あたし、やる事できちゃった」

「なあ……盾道……もしかなくても、怒ってる？」

「……まさか、私がそう簡単に怒るわけないじゃんか。善ちゃんにはよお保健室行つといで。そんじゃね」

僕は立ち上がり、そのまま急いで剣道場に向かう。

〈剣道場〉

「ったくよく、高校じゃいい子ちゃんを通したかったんだけどナ」

「だ……誰だお前……？」

「僕？僕は真面目な一年生ですよ。真面目に剣道がしたい一年生ですよ。真面目で真面目な男です」

日向はそう言いながら不敵に笑みを浮かべ、木刀に着いている血を拭う……。

「だけど聞いてくださいよ！僕、団体行動とか上下関係とか苦手ですってね、先輩とか顧問とかと揉めて、いっつもボコっちゃうんです

よ。それで試合でねーの」

「くっ……だから、剣道部が休部中にこのガッコに来たってわけか……」

「ピンポーン　ここでなら一人で好きにできますからね。でも計算外！立派な剣道場には招かざる先客が！だから、例のバケモノ女こと生徒会長に、草むしりをお願いしたんですけど。いやはやうまく運ばねーもんですねえ！あ、助けを期待してるんなら無駄ですよ。あの女、今頃役員集演説の真っ最中ですから。しっかし、こんなにキレーにしてくれたのは助かったかな。立つ鳥跡を濁さずっスね」

「……ま……待てよ……勝手な事吠えてんじゃねえよ……たった今思い出したわ。俺は昔、剣道少年だったんだよ！！」

門司はボロボロの体に鞭を打ち、竹刀を日向に突き向けて言い放つ。その言葉を聞いた他の不良達が、まるで火が付いたかの如く立ち上がる。

「あー、俺もそうだった」

「そーいや俺も」

「俺も」

「俺なんか日本一に剣士目指してた……気がする」

「……うっぜ！ドロップアウトした奴が簡単に改心して立ち直おろうとしてんじゃーよ！」

そう言っただけ日向は木刀を振りかぶり、不良達の中に駆けていく。

「剣道三倍段って知ってつか！？僕はあんたらの三倍強いって意味だ！」

そして振りかぶった木刀が不良達に振り下ろされようとした……その時。

ガラッ！

「どーもー お邪魔しまーす」

「ああ……お前は確か、人吉と一緒に居た……今取り込み中だ、出て行ってくれ」

「えー、面倒くさい」

「……僕を舐めてるのか？」

「まつさかー。さて、先輩方、良く立ち上がりましたね。カッコいい所あるじゃん 俺、感動しちゃった」ニパッ

「お前……」

「もし先輩方がここで立ち上がらなかったら、先輩方をボコリ終えた日向君を待ち伏せしてぶん殴って終わりっ！ってなっていましたからね」

うんうん、青春だね。あたし、こういう青臭い青春系大好き！

「なあ、今お前、こいつらが立ちあがらなかったら出てこないって言ったよな？」

「うん、言ったね」

「だったらスツこんでろよ！！学園施設を占拠してる雑草どもをむ

しってやってんだ！僕は正しいだろうがあァン」

「……確かに日向君は正しいと思うよ……だけど、めだかつちや善ちゃんの方がもつと正しい。俺は善ちゃんみたいにめだかつちと長く居たわけじゃないから、何処までが正しいのか分からない。けど、強さを振りかざして人を傷つけてる君よりかは万倍正しい！それに、もしこの場に俺じゃなくて善ちゃんが居たら、立ち上がった先輩方を見捨てるほど、善ちゃんは人間を捨ててない！他人のためだとか、人助けとかの高尚な気持ちなんて俺は持ち合わせてはいない！もしも君がまだかつちや善ちゃんの正しさを否定しようとするなら、それは俺が許さない！！」

「……ケツ。お前が許さねーならなんだっつーんだよ！どいつもこいつも面倒くせえ！お前、剣道三倍段って知ってっか！？」

やれやれ、剣道が好きなら、そういつた怒りの感情で剣を振るつちやダメだつて習わなかったのかなこの子は？まあ、お仕置きだね。俺は床に落ちてる竹刀を手に取り、日向君の攻撃を切る。文字通り、切る！！

シュンツ！スパツ！

「な……なな……なんで……竹刀で木刀が……切れるんだよ……」

「大方、木刀にヒビとか切れ目とか入ってたんじゃないの？それじゃ、お仕置きだね」

俺は拳を握りしめ、そのまま日向君をぶん殴る。

「ぶっ飛びな！」

バキッ！

「がっ！？」

シュン！！

「……君に改心しようとしてる人間の邪魔をする権利は無いよ……」

んっ、これで終わりっ！後はめだかつちに任せようっ！……さあ、善ちゃんの様子でも見に行こうかなっ。

「……なんで」

「……どうかしました？」

「なんで俺達を助けてくれたんだよ……」

「んー……先輩方が改心してくれたからかな？それに、立ち上がった先輩方がつこよく見えたんだから、理由なんて要らないよ。それに、あたしは日向君に不意打ちを食らった善ちゃんの仇を討ちに來ただけだから」ニパッ

「……お前……」

「これから頑張ってくださいね？せっかく立ち上がって改心したんだ、頑張らなきゃ嘘だよ？じゃーねー」

さてと、とりあえずは一件落着かニヤーっと。ちかれたちかれた……さて、善ちゃん大丈夫かな？と。

〈後日談〉

その後、どんなやり取りがあったものか、剣道場はみんなで仲良く使うことになったのだー 剣道部（仮）と言っ事で、何と何と、日向君が指導を務めているそうなのだー  
まあ要するに、あの子もめだかつちが好きになってしまったんだニヤー。

そして、あたしが時々剣道場に顔を出すと。

「あ、兄貴！チーッス！！」

『チーッス！！』

何故か俺は皆に兄貴と慕われるようになってしまった……めでたくな  
ないよ……。

そして、会長就任後、ほんの数日でのそんな顛末は、善ちゃんを決  
心させるには十分だった。

「あれ？何だこの花？」

「うむ、これから生徒会業務を行う上での指針としてな、案件をひ  
とつ解決することに、花を一輪飾ろうと考えた。とりあえず二輪だ」

「は、女の子らしいところもあるじゃねーかよ。失敗した時はど  
うすんだ？枯らすのか？」

「失敗などしない、しても数えない。いつか見渡す限り一面に花を  
咲かせるのが、私の夢だ！」

そういつてめだかつちは上を見上げる。その姿に、善ちゃんは見惚れてしまう……。

「でっ、できんのかねそんなこと。お前が募集会ビッチったせいで、結局役員は一人も増えなかったじゃねえか！」

「構わんさ。もとより私は、貴様らを置いてほかの誰かと組む気はない」

「……………ん？貴様ら？……………らってことはもしかして……………」

「そこに居るのだから、盾道」

「ありやりや、見つかった」

もー、まためだかつちに見つかって……………しまったあああああ！！

「でもさー、なんでまだかつちは善ちゃんやあたしにこだわるの？それ以前に、僕たちは他人だつてばよー」

「おかしなことを言うものだ。私は貴様らを他人と思ったことなど、生まれて一度もないぞ。貴様らの事は私が一番よく分かっておるし、私の事は貴様らが一番良く分かっておるのだから！」

な、なんだってー！？あたしはこんなにめだかつちに慕われていたなんて！？俺感激！！

「人吉は二歳の頃からずっと私の事を心配してくれている。盾道は七歳の頃からずっと私の事を支えてくれている。貴様らだけが今でも変わらず私の事を守ってくれている。そんな貴様らが居るからこそ、私は安心して他人のために動けるのだ！！」

「……………どれでもいいや、その腕に巻いてるヤツ一個よこせ」

「……………どういう意味だ？」

「……………っ、振り回されてやるっつってんだ！！気が気でなくて見てらんねーんだよ、やりゃーいーんだろーがやりゃー！！俺がこの箱庭<sup>デン</sup>学園をお花畑にしてやつから、さっさとよこせ！」

「ふふふ　そこまでめだかつちに愛されてるのなら、僕も愛を返さないかね〜　良いよ、僕もめだかつちや善ちゃんは家族同然の様に思っどるし、僕にもその腕に着けてるヤツ、一個くれないかな？めだかちゃん」

うん、たまにはめだかつちじゃなくめだかちゃんと呼ぶのも良いかもしれないな。

「……ふん、ひねくれ者め、盾道を見習え。それにしても貴様ら、随分と気を持たせてくれたじゃないか。しかしまあ、一応礼を言っておこう。……ありがとおっ!!！」

そう言つてめだかちゃんは僕と善ちゃんに抱き着く。僕はすっかり抱き返したよ？善ちゃんは顔を赤くしてトリップしてたけどwww

ww

そう、これがめだかちゃんの真骨頂その？ツンデレ！

まあ、僕はそんなめだかちゃんも好きだからね。

「あ、でもちゃんと庶務ドシケツからなのな」

「あたしは副会長だ」

「はっ？ズルくね!？」

「手柄を立てて這い上がれ」

やったね！僕副会長になっちった ラッキー

**第三話 改心しようとしてる人間の邪魔をする奴は、俺が許さない（後書き）**

読んでくださりありがとうございます

第四話 いじめ 良くない 絶対！（前書き）

ごまっす

「田ぶじくらの更新です

始まります

#### 第四話 いじめ 良くない 絶対！

「あゝ、ジャンプ買ってたら遅くなっちゃったな。たぶん、もう二人は生徒会室に来てるよな」

やっぱコンビニは駄目だな。遠すぎ！もう、これだから箱庭学園は無駄に広すぎなんだよ！！  
さて、もう少しで着くな。

「むっ……待て、その貴様」

「むいつ？」

何か変な人に呼び止められてしまった。僕急いでるのに！誰だよ全く！！

「この偉大なる王の俺を無視して通り過ぎようとするとは……」

「あのね、あたしは今急いでるんよ。君に付き合ってる暇は無いのですよ！んじゃね！」

僕はなんか意味の分からない人を無視して走り出す。

「ほう、更に無視までするとは……いい度胸ではないか。まあいい、  
『跪け』！」

ドッゴオン！

「あ痛！？」

……？あれあれ？あたしはどうして地面と熱い口づけを交わしてる  
のかな？それと、これ、前にどっかで食らった様な……ああ、そっ  
か……思い出したよ。

「そっかそっか、思い出した思い出した」

「ほお、俺の言葉の重みを食らって尚口を利けるか」

「……黙れよド三流……少し俺の時間とスケジュールを確認してか  
ら喧嘩売れ雑魚」

俺は普通に立ち上がり、制服に着いたゴミを払う。全く、制服を汚  
すとかマジ無いでしょ、結構これ気に入ってるんだぜ？

「その口の利き方……王であるこの俺にたて突く気か？……」平伏  
せ『…』

「ああ、ただし、てめえがな」

ボタンー！

「ぐっ！？」

全くよお、懐かしい奴を見たな。でも、少しは時と場合を考えて  
ほしかった訳よ……なあ？都城王士。

「な、何故王であるこの俺が！？」

「おいおい、まだ思い出せてないのかよ？俺はとっくに思い出した  
ぜ？それとも、こつ呼んだ方が思い出すか？俺様キャラの都城君…  
…」

「その呼び方……ま、まさか……貴様は！？」

「気づくのがおっせえんだよ……」

「何故……何故！貴様がこの箱庭学園に居る！？矛川盾道！？」

「あつ？何故居るのかつて？幼馴染がこの学校を受けたから入つたに決まつてんじゃないかねえか。じゃあな、王土先輩、俺は忙しいのでもう行くわ」

懐かしいねえ、全くもって懐かしいよ。俺が居ない所で王様でも気取ろうとしたのかねあの子は？カツ！運命は残酷だねえ、ククク！

〈生徒会室〉

「それで？どうしてこの生徒会室にボロボロの陸上用スパイクと、如何にも脅してますよ的な怪文書があるのかなめだかちゃん。それと善吉、制服の内側にジャージ着んな、ださい」

「いきなりキャラ変えんな！それとほつとけ！」

全くもう、変な王様キャラ野郎に絡まれてすっかり出遅れちゃった。もう今日の議題とか決まっちゃってるじゃんかYO！それと善吉マジでださいYO

「ふむ、有明二年生がな。部活の陸上大会の短距離走で代表に選ばれたのだが、それを快く思っていない生徒が嫌がらせをしている。その犯人を探してほしいと依頼が来たのだ」

いや、有明二年生とか言われても分からないから。でもま、粗方分かったよ。どうやらその有明先輩と言う方が、どなたかの嫉妬心に駆られた先輩に虐めを受けていると。そして、その犯人を捜して捕まえてほしい、そんな所かな？

「それで？期限とかあるのかい？」

「今日中だそうだ……」

なん……だと……ただでさえ人数が多い陸上部の部員。その中でピンポイントで犯人を探すとか……しかも今日中……それなんて鬼畜ゲー？高橋名人の冒険島も真っ青だ……。

「それで？今日中と言い放ったんだ、何かそれなりに手掛かりは見つけたんだろうね？」

「いや……それもまだ……」

「そうだな。犯人は『陸上部女子』で『陸上暦はそれなりに長く』

『短距離走を専門』とし、『有明二年生と同種のシューズを愛用』、『左きき』で『文車新聞を購読』し、『23地区ブロックに住んでいる』誰かだ」

「……………はあ？」

善ちゃんが訳分からんって顔になってる、もちろん僕もさ。頼むから僕と善ちゃんにも分かるように説明してくだしゃあ。

「この靴はハサミで切り裂かれておる。靴をハサミで切るというのは、実は結構な重労働でな。しかし見れみれば、このように的確に縫い目に刃を入れておる。的確過ぎるくらいだ……………」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「……………切り抜かれた新聞は23地区ブロックにのみ配られた14版だ」

……………うん、今しがためだかつちの推理を聞いたんだけど……………先ず最初……………。

((推理力がありすぎて、気持ち悪い!!))

たぶん善ちゃんも同じことを思ったに違いない、いや、思ってもらわないと困る。だって新聞の記事とかを普通全部覚えれる？瞬間記憶能力者か完全記憶能力者でもない以上無理な事だよそれって。

「これらの条件に当てはまる者の数はさほど多くはあるまい。探し出して見つけ出そう。他人の努力を否定する行為、頑張る人間の足を引っ張る行為。わたしはそういう行為が大嫌いだ！！」

わぁお、めだかつちが持つてるカップの中の紅茶が沸騰してるよ。あれどうなってるんだろうね？あれかな？怒り過ぎて体温が熱くなつて、中の紅茶が沸騰してるとか？

あはは、ないない、そんな事があるのなら、火要らず出しね。

「私は怒っているぞ善吉、盾道！目安箱への投書に基づき、生徒会を執行する！！」

ん、めだかつちが怒るのも最もだけど、いじめってそう簡単に消えるものじゃないしな。実際、僕の時もそうだったし。

でもま、めだかつちが今日中に犯人を捜し出して止めさせると言うなら仕方ないか。

（陸上部）

「陸上部所属、三年九組諫早先輩。有明先輩と同じ短距離を専門と

するアスリートで、利き腕は左、同じスパイク吐いてるのは見てのとーり！お住まいは23地区ブロックで三年前から文車新聞を購読中。だつてさ」

「さつすが不知火 とても情報に長けてるね そんな不知火には僕からの熱い抱擁を上げよう」

ただいま俺と不知火とめだかつちと善ちゃんは陸上部が練習をしているグラウンドに来ています。え？何故不知火も居るのかって？それは不知火がとても情報通だからだよん

「ちなみにあの諫早先輩、有明先輩が代表に選ばれたせいでレギュラー落ちしてます」

「……そりゃ決まりだな」

「だねだね 三年が二年に抜かれたら屈辱だろうし、犯人はほとんどあの先輩で間違いないね」

「しかしな、善吉、盾道よ」

僕と善ちゃんが諫早先輩を怪しんで……つつかもはや犯人と決めつけたさなか、めだかつちがずっと出てくる。

「実質的な証拠はまだ何もないのだ。ほとんどという言葉の意味は絶対ではない。状況証拠だけで他人を悪人と決めつけるのは良くないな」

「……上から目線性前善説もいーけどさ、物的証拠なんて集めようがねーだろ、俺ら警察じゃねーんだからよ！」

「だよねー。まさか本人に直接聞くわけにもいかないしね……って、あれー？」

めだかつち……。

「諫早三年生、貴様が……」

マジでやるのかよ……。

「犯人か？」

……ああ、こりゃ駄目だ。でもそこがめだかつちか……今に始まった事じゃないし……でもいまだに慣れない私が居るよ……。

善ちゃんと僕は何か立ち直り、諫早先輩を追うことにした。

「ところで人吉！」

「あ!？」

「なんで制服の下にジャージ着てんの？ヘンだよ？」

「今聞くことか!？」

確かに今聞くことではないね。それより早くいかないと見逃しちゃうし、早く行こうって。

タッタッタッタッタッ!!

「(ど……どうして、こんなに早く私のことが……)!!」

諫早先輩が全速力で逃げてる中、ふと後ろを見たら、そこには……。

それにしても諫早先輩すごいな、まだめだかつちにつかまらないで逃げてるよ。

「もつとも、個人的な好みでいえば、競走^ラよりも高跳び（ジャンプ）の方が私は好きでな」

そう言いながらめだかつちは諫早先輩の頭上を飛び越え、そのまま諫早先輩の前に着地する。

スタツ。

「さて、聞こえなかったようなのでもう一度機構。諫早三年生、貴様が犯人か？」

「（殺される！！）ちっ、違う違う！知らないってあたしそんなの！！！」

諫早先輩が思いっきり怪しい慌てぶりで否定している。その言い方がすでに犯人ですよと言ってるようなモノなんですよね

「有明さんのスパイクにハサミなんて入れてないし！「陸上部やめろ」なんて手紙も出してない……（ああああああ！何言ってるんだよあたし！聞かれても無い事自分からわざわざ……！！）」

あはは、テンパってるテンパってるwww何これ超受けるんで
すけどwww

「……そうか、知らないと言っか……」

諫早先輩は恐怖のあまり目を瞑ってしまっ……だけど。

ポン。

「知らないのならばそれどよいのだ、練習の邪魔をして悪かったな」

「……………え？」

めだかつちは諫早先輩を肩をポンと叩き、練習を邪魔してしまった
ことに謝罪し、そのまま通り過ぎる。

「あ、あの、ちょっと……」

「?どうした、何か用か？」

「い、いや、そうじゃなくて……」

「ああ、そうそう。良い忘れていた。さっきは本当にいい走りであったぞ、貴様の普段からの鍛錬の程がうかがえる、その調子で精進し続けるがよい！私は頑張る人間が大好きなのだ！」

そう言って去って行くめだかつち、ヒュー、かっくいいー。そんなじよそこらの男よりもカッコいいよ。

「な……なんなのあのコ、わけわかんない。人を疑うってことを知らないの……？」

「違いますよ諫早先輩。めだかちゃんは人を疑うことを知らないんじゃない」

「人を信じることを知ってるんですよ」

「……君たちは……君はどうして制服の下にジャージを着てるの？それと君はどうして女の子を抱っこしてるの？へんよ」

「」「気にしないでください」

「……カッコいいって言葉！」

一応この人には常識があるみたいだ。でも善ちゃん、敬語忘れてるよ。

「……めだかちゃんは行為を嫌うことはあっても、人間を嫌うことではないんですよ。ま、中学までならあいつが見逃した悪党共をぶいのめすのが俺の仕事だったんですけど、今の俺の仕事は目安箱の管理らしんでね。今回だけは俺も会長の流儀にならうときますよ。あんたはもう二度とあんなことはしねえって、信じといてやる」

「そうだね、郷に入っては郷に従え。ま、ちなみに私の中学時代の仕事は、善ちゃんが傷つけた悪党共を治療する仕事だったんだけど、今回は無さそうだな」

そう言っ僕と善ちゃんも去って行く。

「……あたし……あたしは……」

うんうん、嫉妬心に駆られた女子が改心する絵。サマになるね、絵になるね。でも、嫉妬程醜い感情も無いかな。さて、今回もこれにて一件落着かな？

〈後日談と言つより翌日〉

「くっそー、このカツロよさがどうして伝わんねーかなあ」

「伝わるわきゃねえだろーが」

「だからいきなりキャラ変えんなって！」

「だってダセーんだもんよーって、あれ？どちら様？」

何か気づいたら後ろに生徒が来ていたよ。

「えっと……」

「あれ？有明先輩、今日はどうかしましたか？」

ふうーん、あの子が有明先輩ね。

「それがその……今度はロッカーから代用してたスニーカーがなく
なつてて……」

「「!?!?」」

なん……だと……まさか、あのコが改心しなかったとでも?これは由々しき問題だ……善ちゃんが暴れないと良いけど……。

「それでね……代わりに新品のスパイクとこんな手紙が入ってたんだけど……どういうことだと思っ?」

そこにはごめんと謝罪文が貼られていた手紙と、新しいスパイクがあった……。なんだ、謝罪の為にやった事か、なら仕方ない……あれ?でもなんで代用のスパイクを取る必要があるんだ?不思議だ……。

こうして事件は無事解決した。有明先輩も今晚からはぐっすり眠れるだろう。……ただい……。

「おのれ犯人め……今度はスパイクを盗むとは……」

僕と善ちゃんの幼馴染がそのことに気づくのは、もう少し後の話である。

第四話 いじめ 良くない 絶対！（後書き）

王土をこんなに早く出したのには訳があるので、深く突っ込まない
てください

ただフラグを立てたかっただけなので

読んでくださり、ありがとうございました

第五話 動物は嫌いなのだ……（前書き）

少し話が変わってしまいました

本編では1日ではなく次の日にめだかちゃんが動いてますが、間違
って1日でめだかちゃんが動いています

……直す気力が無かったのでございます、気づいたらもう完成して
ました

……本編をどうぞ……

第五話 動物は嫌いなのだ……

箱庭学園第九十九代生徒会長黒神めだかが設置した目安箱は、生徒の間では『めだかボックス』と呼ばれ、早くも好評を博していた。で、その目安箱の管理こそ、生徒会庶務たる俺にメインの仕事な訳なのだ……。

「……なんでお前も着いてくるんだよ……」

「善ちゃんが手を抜かないかチエックしてるのよん でもでも！少しばかり手を抜いてめだかつちにポコポコのされる善ちゃんも見てみたいし、手抜いてましたって報告しちゃおうかな」

「止める！つた……おつ、今日は3通も入ってやがる。みんな色々悩んでんだな……」

「へえ、うら若き少年少女達の悩みか……なんかあれだね、うん……現代社会においての若い人たちの悩みって妙に生々しかったり、ドロドロしてたりするよね……」

「そんな昼ドラみたいな悩みを書くような生徒が居るわけないだろっ……でも、今回は異性を放つ相談が一つあるようだぜ……」

~~~~~  
~~~~~

「そんな感じで、本日の投書は3件……バスケット部部室の普請要請。学食の新メニュー開発。そして……子犬探しだ」

「子犬探し？」

「ああ、去年の冬休み、学園内ではぐれちゃったんだってさ。それからずっと行方不明で、そいつを見つけてくれてくれて相談だ……それで、いつまでお前は俺にしがみ付いてるんだ……？」

「いいいい、犬怖い！犬嫌だ！犬嫌い！いやああああ！！！」

「落ち着け、何もここに犬が居るわけじゃないだろうが！」

「……では、バスケット部は私が、学食の件は盾道が担当しよう。子犬探しの件は、貴様に任せる」

「うんうんうん、うん！そそそそ、その方がいいいいいい、良いよ……！」

「ん？まあ構わないけど、俺に一任しちゃっていいのかよ」

「言わせるでない。貴様……私のことを知っているであろう……動物が、苦手なんだよ……」

（食堂）

全く、誰だよう！子犬探しなんて頼んだ輩は！犬怖いよ、嫌だよ……善ちゃん、頼んだよ……。

「それで？どんな学食を作りたいんですか？柄沢先輩」

「んー、そうだね。やっぱり、男子はガッツリ！女子はサッパリ！な学食を作りたい訳なんだよ！」

柄沢先輩。何故かこの生徒は学食の料理の手伝いをしたりしている変わった生徒だ。何でも料理を作ることが大好きで、ちゃんと許可を取って、学食で料理をしているそうだ。

「ふむふむ……では……男子はやっぱりスタミナ重視のガッツリ、女子は多少油が多めでも味付けがサッパリしたもの……て所ですか？」

「ん、男子は大体そうなんだけど、女子がね。私はサツパリしたものが良いとは思っただけど、女子の中にもたまに、ガッツリ行きたい子も居るしさ」

難しいニヤ、だったらいつその事定食系統を出せば良いのでは？生姜焼き定食屋カツ定食など。それとも、ファーストフードよろしくハンバーガーとか出してみては？

「それだったらやっぱり、多少ガッツリでも、サツパリしてればいかなって思ってるんだけど……」

「そうですね、あ、でも、僕みたいにガッツリ行きたくない男子とかはどうすれば良いんですか？」

「えっ、君男子だったの？」

「一応性別は男の娘なので、僕はあまりガッツリではなく、胃にも優しいサツパリ系の物が良いですね」

「……なんか時が違うような気もするけど……そうか、確かにそういう男子も少なくは無いね。じゃあさ、そういう子は野菜系の学食作ってみたらどうかかな？」

野菜系の学食か……確かに、それだったら野菜好きとかの方にも良いし、ガッツリ系が苦手な人でも、少し濃いめの味付けをした野菜炒めなら行けるのでは？」

「それは良い考えだと思いますよ」

「でしょでしょ　今から作ってみるからさ、味見お願い！」

「良いですよ、あたしも柄沢先輩の料理食べてみたいですし」

「あれ？でも盾道君って良く学食に来てなかったっけ？」

「ああ、あれは友達に良くご飯を奢るからですよ。僕は一応自分で弁当を作って持ってきてるので」

「そっか、もし新しい学食できたら、食べに来てよね」

「分かりました。僕も一応案とか出したりして出来た物ですしね、食べてみないと駄目ですよ。それじゃ、待っています」

「はいよっ…」

「数十分後」

「はいっ、お待たせ！」

「うわっ、美味しそう……」

「一応試作品だけどね、それじゃ、早く食べて食べてっ！」

「では、いただきます」

ぱくっ、モグモグ……。

「どうかな？」

「……うん、良いんじゃないですか？結構味も濃いめで、それでいてサッパリしてますし。これなら大丈夫だと思いますよ？」

「そっか、じゃあこれは採用っと。んじゃ次はこれ、ガッツリ行きたい人用」

ドンっ！

……えつと……えへへ……、これ、確かにガッツリ行きたい人向けだよ。でもね……限度を知らうよ……豚カツチキンカツ牛カツ……えつと……3種類の肉に加え更に卵で閉じてある……うん……ガッツリやね……これ、不知火辺りならいっぱい食べそうだ……。

「えつと……柄沢先輩？」

「ん？何？」

「……重いです……これを私に食せと？」

「うん、そつぢよ。一口だけでも良いから、早く早く！」

「は、はい……分かりました……」

流石にこれ全部を食べるのは俺には無理だ……一口だけなら何とか……。

そう思いながら僕は一口だけ食べる……。

モグモグっ……。

「どうかな？」

「……い、良いんではないでしょうか……あはは」

濃い……味付けも然るとこなから、この肉の圧倒的存在感……こちらも濃い。そしてこの喉元まで来ての喉越しがキツイ……最後に、胃に到達してからの重さ……今の僕に理解できない……。

「顔が引きつってるけど、大丈夫？」

「あ、はい……少し慣れない物を食べましたからね……。普段なら揚げ物とか丼物とか食べないんで……」

ていつかあの短時間で二品……内の一つが丼物……作れるとかすぎ……でも、これで終わりか……助かった。

「さて、次はこちら！」

「まだあるんですか!?!」

「うんっ、後5品ほど」

「作り過ぎじゃあああああい!!!!」

ヤバい……もう僕の胃は活動限界時間を過ぎている……最初の一品を完食し、次に丼物を一口。それに加え後5品……駄目だ……僕は死んだ……。

~~~~~

「はう……や、やっと終わったのら……」

お腹がパンパンだ……痛い……全く、あんなに僕に食べさせやがって、先輩だから何も言わなかったが、同学年だったら文句を言ってた所だよ。

それよりも、善ちゃんの様子でも見に行こうかな……。

「僕は善ちゃんの居場所を『知らない』が『知っている』」

……ふん……結構遠いな……ま、行けなくもないかな。んじゃ、行きますか……。

「箱庭学園内の何処か」

「よっど……」

着いた着いたつと、まだ探し途中だと良いな。見つけて連れて行つてる最中とかだったなら全速力で逃げよう。

「さあ、怖くないぞ」

あれ？この声はめだかつち？誰に話しかけてるんだろっ？

「撫でてやるっ？ギョツとしてやるっ？一緒に遊んでやるっ！だからさあ！私に貴様を触らせる！！」

撫でてやるっ？ギョツとしてやるっ？だから私に貴様を触らせる？……えつと、すごく、嫌な予感しかしないんだけど……。

「あつ、ちよっ！？どこ行くんだよ！？」

シュッ！

あれ？何か曲がって出てき……ぎゃあああああああああ！！

「いやあああああああ！？犬！犬うううううう！」

「！？わん！」

ヤバい！目がハート型になってる！？

「あ、盾道！その犬を捕まえてくれ！」

「うえええええん！！犬怖いよおおお！！あつち行けえええ  
！来るなああああ！俺のそばに近寄るなーーーー！！！」

「わふっ！ー！」

いやあああああ！飛び掛かって来たあああああ！？

ボタンっ！

「むむむっ」



~~~~~  
~~~~~

「えー、というわけでございまして！ボルゾイくんは無事投書主のもとに帰りました。子犬の頃より若干人懐っこくなっているようですが、一件落着には違いないと」

「……私は……あんな可愛らしいワンちゃんにもなついてもらえないなんて、私はどうしようもなく駄目な人間だ……」

「犬怖い犬怖い犬怖い犬怖い犬怖い……めだかつちが犬に見える……めだかつち怖いめだかつち怖いめだかつち怖い……」

「いやまあな？確かにお前は人間だよ。それと盾道、落ち着け、これはただの衣装だ……」

動物が大好きだったり落ち込んだり、動物が苦手で落ち込んだり。めだかちゃんと盾道は、案外人間みのある奴なのだ。

第五話 動物は嫌いなのだ……（後書き）

うん……あれだね、駄作も良い所だね

それに、オリジナルの話とキャラ出しちゃったよ……

でも柄沢先輩はもう出ませんので

しかしGWは暇だ……でも明日は部活の大会……うん、めんどくさい

まあ、頑張ろう……

読んでくださり、ありがとうございます

第六話 善ちゃん危機一髪！（前書き）

うっひよおおおお！鍋島せんぱああああい！

鍋島先輩 k t k r！方言萌えの俺の血が滾る！

鍋島先輩可愛いよ！鍋島先輩マジ天使！つつか関西弁とか反則！流石反則王！

つつわけで、本編はじまります

## 第六話 善ちゃん危機一髪！

「善吉、盾道、今日は柔道部に行くぞ」

うん……開始早々これかよ……え？何が起こったのかって？僕と善ちゃんが生徒会室に入ったら、めだかつちが下着姿で柔道着を突き出していた……何を言ってるのか分からないと思うが、俺も何を言ってるのか分からない……頭がどうにか……へ？  
ポルナレフ的説明は良いから早く進め？全く、とんだ我が儘さんだな。

ピシヤッ！バチッ！シャーツ！パチパチッ！

「鍵をかける！カーテンを閉める！人目をはばかれ！何遍言ったら分かるんだ！」

「？さっぱり分からん」

僕と善ちゃんは速攻で窓と鍵とカーテンを閉め、急いで電気を着ける。全く、いい加減その露出癖を直してもらいたい物だよ……いくら僕が女顔でも、女の子の体に興味があるお年頃なんだからね！

「練り上げたこの肉体を衆目にさらすことに一体何をためらう必要

がある？」

「むしろ見せたいみたいなこと言ってるじゃねえ！！」

流石めだかつち、やっぱり真性のおバカさんだ。どこか頭のネジが一本どっかに飛んで行ってしまっているようだ、後でホームセンター辺りに行って買ってこよう。

「……で、何だって？柔道部？」

「うむ、柔道部部长、鍋島三年生を知っているな？彼女から目安箱に投書があったのだ」

「鍋島って、チームトクタイ特待生の鍋島猫美さんか？あの有名な？柔道界の反則王と呼ばれたあの人？あの人今部長だったのかよ……」

「何々？その如何にも痛い異名は？反則王？そんな海賊王じゃあるまいしwww」

「黙つとけ盾道。けど、話聞く限り、あんま悩むタイプにゃ思えねーぞ？」

「ふむ、部長とは言え、もつすぐ引退だからな。そこで、私達に後継者選びを手伝ってほしいそうだな。まあ何にせよ、行ってみようではないか。柔道部といえば、懐かしい顔にも会えるだろうしな」

「懐かしい顔？ねえねえめだかつち、誰それ？」

「盾道も良く知ってる奴だ」

……俺も良く知ってる奴？んー、誰だっけ……まあ良いか。行けば分かるしね

（柔道部）

「やーやーようこいらっしやいませ！ウチが差出人！柔道部部长の鍋島猫美です！本日はどーぞよろしく！」

んんー、意外なキャラだね。反則王って呼ばれてるから、一体どんな人かと思えば、まさかこんな普通の人は……。。

「生徒会長の黒神めだかだ。今日はできる限りのことをさせてもらっぞ」

「うんうん、頼りにしとるで黒神ちゃん！」

そう挨拶して、お互いは握手を交わす。女の友情だね、良いね、青春の匂いがするよ。

「いやー、ウチは部長ゆーても名前だけみたいなものやったから、誰に後を継がせたらえーんかなんか決められんなー！」

「あー、そーや。その前に！ジブンとジブんに挨拶したいゆー奴おんねん！」

へ？あたしもデスか？やっぱさっきめだかつちが言った懐かしい顔の人かな？

「阿久根！おーい阿久根クン！」

……阿久根？……ああ！もしかしてあー君！？へえ、懐かしいな、まさかあのあー君が居るとは……でも善ちゃんが険しい顔をしてる……あれ？もしかして僕だけ？知らなかったのって……。

ガチャツ、ふわあつ……きゅ。

すたすたすたすた。

まずはやっぱめだかつちからかく、まあ当然だニヤー。

「ご無沙汰しておりますめだかさん。生徒会立ち上げの大事な時期に、お気をわずらわせてはいけないと控えおりましたが。ずっとあなたに再開できる日を心待ちにしておりました」

「……………堅苦しい真似はよせ、阿久根二年生。他の者が見ておるぞ。貴様ほどの男がそのようにふるまっては示しがつくまい」

「いえ、誇りこそすれ、あなたにかしづく姿を恥とは思いません。今の俺があるのはあなたとあの方のおかげなのですから。めだかさんと盾道さんには、いくら感謝しても足りない……………」

ガシッ……………。

あつ、めだかつちがあー君の頭をつかんだ……………。

「私に感謝していると言うのなら、頭を下げるな！胸を張れ！！」

「は……………はいいっ！めだかさんのっ御心のままにっ！」

うわー、すごいね、あー君のめだかつち至上主義。流石にあれはど  
うかと俺も思うよ……。

「おっと、それはそうとして、生徒会を執行せねばな。後継者、つ  
まりは新部長の選定だったか。とりあえず貴様は特別枠だ、阿久根  
二年生。盾道と善吉と談笑しておいてくれ。貴様達は貴様達で積も  
る話があるだろう」

あ、あー君がほわわんとしながらこっちに来た……あれ？そして何  
故今度は僕にかしずくの？

「遅くなって申し訳ありません盾道さん。最初はめだかさんと決め  
ていたので、次になってしまいました」

「んー、私としては別に良いんだけどね でもでも あー君が元氣  
そうで何よりだよ！あつ、そうだった、あー君先輩だもんね、敬語  
の方が良いね。それで阿久根先輩」

「いえっ！今まで通りあー君と！それと、敬語は要りません！」

「んー、そうかい？じゃああー君、かしずくの止めて？僕もそこま  
でしてもらいたいとも思っていないからさ、自然体で良いよ」

「そうですね、では……」

そう言って、あー君は立ち上がる。あー、身長高くなってる……やっぱ中学時代とは全然違うな。

「あー君ガタイ良くなったね。身長も伸びたし……良いな、私なんてちんちくりんのままだし」

「今の盾道さんでも十分可愛いですよ」

「む。俺は男だぜあー君、流石に可愛いは良そうぜ」

「すみません、盾道さん！」

「頭下げないの！そう簡単に男の子が頭下げちゃ、他の人に示しがつかないよ？めだかつちも言ってたじゃん」

「はいっ！ありがとうございます！」

……あれ？何だろう、めだかつちと話し終えた後ののはわわんな感じ

の空気じゃなくて……こう、甘酸っぱい空気になってるのは気のせいかな？あー君や。

「それで……久しぶりだね……えーっと、キミ名前なんだっけ？」

「人吉善吉ですよ。ところで、アンター体誰ですか？」

もう、相変わらず二人は仲悪いな。昔のまんまだよこれじゃっ！

「虫が！相変わらずめだかさんと盾道さんの足を引つ張る仕事に精を出しているらしいな！言っておくが、めだかさんの支持率が100%に達しなかったのはキミのせいだぞ……！」

「カツ！んま意地悪言わないくださいよ！人格者で通ってる柔道界のプリンスが、下級生いじめなんて、ファンの女の子が知ったら泣いちゃいますよ？」

「フン！俺は心身ともにめだかさんと盾道さんに使える者だ！めだかさんと盾道さんのためになるなら、毒蛇の如く嫌われようと望むところだ！」

「えー？嫌われ者になっちゃ悲しいよ？あー君、間違ってもそんな事はもう考えないでよ？」

「はいっ！分かりました！」

「変わり身はっや!？」

「喧嘩も良いけどさ、めだかつちの選定、始まりそうだよ？」

なんか大勢の柔道部員が集まってるよ。あんなに居たんかいな、柔道やってる奴。

「さて、私に言わせれば、柔道は教わるものではなく、学ぶものだ。それゆえに！まずは選定してやろう、貴様達の値打ちをな！我こそはと思う者から名乗り出よ！全員まとめて一人残らず！私が相手してやろう!！」

あはははは！よう言うなめだかつちは！まあ、実際相手になるのはあー君と鍋島先輩位かね？

「ククツ！ナメられたもんやなー、我が栄光の柔道部も！」

「無理からぬ話ですよ。いくら専門分野と言っても、めだかさんと勝負になるのは俺かアンタか盾道さんくらいでしょう」

「ん？盾道って、あの女子が？」

「あはは、あの人、男ですよ」

「……………むっちゃん可愛い顔しとんのか……………でも、あの子も柔道出来るんか？」

「……………いえ……………できるできないに関係なく、盾道さんはすべてにおいて異常なんです……………なら、訂正しましょう。めだかさんの相手になるのは俺かアンタくらいです……………ですが、この中の誰一人として、盾道さんには勝てません……………」と

ボタンー！！

「……………一応副部長なんやけどな……………おいしいなあ城南くん。あんなに付け入る隙もないめでかちゃんでも、盾道くんには適わないと？」

「はい……………勝てませんね」

んー、何かそこのお二人さん。なんか僕を人外扱いしてませんか？  
つつか柔道やったことねーのにめだかつちに勝てるか！死ぬわ！

「しかし……さすがだなめだかさんは、中学生の頃より輝きを増している！」

あはは、駄目だこりゃ、完全にトリップしてるよ……。

「ファイター！めだかつち！」

バタン！

めだかつちが柔道部員をちぎっては投げちぎっては投げを繰り返しているよ。ありえねー、女ってここまで強くなるもんなの？

つつかめだかつち無双過ぎるwwwって、なんか善ちゃんとおー君がまた喧嘩してるよ、あーいうのを犬猿の仲言うのかな……あれあれ？なぜか善ちゃんが更衣室に向かってるよ、柔道着片手に

「ねーねーあー君や、何故に善ちゃんは柔道着片手に更衣室向かってるの？」

「た、盾道さん……上目づかいで首かしげないでくださいよ……」

「いやいや、なんで顔赤くしとんねん阿久根。人吉クンわな、今か

「ら阿久根と試合すんねん」

「試合？何故に試合をするんだか……はっ、まさか！？めだかつちを巡つての喧嘩！？」

「めだかちゃんは関係あらへんよ」

「いややわー、心読まんといってくださいよ鍋島先輩」

「んー、盾道クン、もうちょい緊張感もつといた方がええで？」

「なぜですのん？」

「もしこの勝負人吉クンが負けたら、人吉クンはウチがもらっからな！」

「な、何だつてー！？善ちゃんが勝負に負けたら善ちゃんが鍋島先輩の婿になるだつて！？」

「いや、誰も婿になるなんて言つてへんから……」

「へ？違つんですの？それと心を読まんといってくださいって」

「人吉クンが負けたら柔道部が人吉クンをもらつ、分かつたか？」

おう……善ちゃん、何という事だ、君はこれから柔道部員としての学園生活を過ごしていくのか……ご愁傷様ですぜ人吉クン……。

「お、人吉クンが来たみたいやな……」

「あひゃひゃ、何だ善ちゃん、柔道着似合ってるじゃん」

「うるせー」

不機嫌ですなー、でも善ちゃんがどう足掻こうともあー君には勝てないだろうね。善ちゃんは普通で、あー君は特待生<sup>チームトクタイ</sup>。この差は流石に……。

「ほんなら柔道部恒例の阿久根方式な！無制限十本勝負対無制限一本勝負！阿久根クンに十本取られるまでに一本でも取れたらジブンの勝ちや、人吉クン！」

「ふん、尻尾を巻いて逃げなかったことだけは褒めてやろう。ああ、

でもしあかし、虫に尻尾はなかったか」

「なんですか、逃げるってアリだったんですか。先に行ってくださいよ、そういうことは」

ええー、ここまで来てまさかのへタレ発言とか……男としてそれはどうよ善ちゃん……。

「逃げる？そんなものアリなわけがないだろう。誰からの相談でも誰からの挑戦でも受け入れる！如何な内容でも如何な条件でも！如何な困難でも如何な理不尽でも享受する！それが箱庭学園生徒会だ！！人吉善吉、私は貴様に負けるなどとは言わん！しかし逃げることは許さんぞ！」

めだかつちきつびしいー、まあ俺も賛成やね。いくら勝算がない戦いでも、逃げたら駄目だな。

でも……善ちゃんがいくら努力の子でも、根性があっても……。

「一気に決めるぜ！先手必勝！」

「人吉クン。俺は何もキミの全てを否定しているわけじゃない。めだかさんについていくために費やしてきたキミの努力は認めている。だが……」

ボタン！！

「努力以外は認めない！後手必殺！！」

「ガ……ガハアツ！？」

「立て、あと九本だ。キミはめだかあんと盾道さんの前で何度も何度も虫のようにひっくり返す。醜態をさらして負けるのだ」

ノーマル チームトクタイ  
「普通が特待生の足元にも及ばない……。それが世の定め、変えられない掟なのだ。」

凡人は努力をしても、しょせん才能がある奴の一か二しか極められない。でもま、たまにそれを覆しちゃう子も居るけどね。鍋島先輩とか。

「あー、さっすが阿久根クン、綺麗な一本やな」

「素人なんて綺麗もなんもわからないんですけど……」

「ホンマ天才的で……つまらん柔道や……」

「……どうやら随分、天才が嫌いなようだな、鍋島三年生」

「うん、嫌いやで大嫌いや。黒神ちゃんのこと阿久根クンのこと  
もな」

「あれ？俺は？」

「盾道クンはよわからへんのや」

「まあ、それが俺ですからね。でも、僕も才能がある子は嫌いです  
よ……もちろん、人間皆嫌いですがね……」

「……ほお、どういふことや？」

「言葉通りの意味ですよ？人間誰しも、必ず才能はあります。善  
ちやんだったら努力の才能が、あー君だったら善ちゃんよりも視野の  
広い多彩なところ。めだかつちは人の上に立つこと、鍋島先輩だっ  
たら反則と言う才能があるじゃないですか？僕に言わせれば、努力  
＝才能なんです。僕は努力なんてできないですから」

「それは気持ちの問題ちゃうか？」

「いえ、努力しても無駄になるくらいなら、しない方が良い。俺はそう考えてますから。俺は努力しない駄目人間ですから。そういった努力できる人や才能がある人は……正直見てて気分がアレですよ」

「……じゃあ盾道クン。どうしてめだかちゃんと人吉クンと一緒に居るんや？」

「愚問ですね。面白いからですよ、友達と言う事もありますが。第一の理由が面白いから。黒神めだかという人間が、何処まで人を幸せにできるか見たいから……人吉善吉が、何処まで黒神めだかに着いていけるか、と、これが建前」

「ほな、本音は？」

「大好きだからに決まってるじゃないですか」

「……矛盾しとるやないか……」

「それが俺ですからね」

結局俺は人間が嫌いで嫌いで仕方ないけど、僕は人間が好きで好きでたまらない。好きと嫌いは俺の中では表裏一体。

「んー、でもなー、ウチは人吉くんが欲しいねん。せやから、阿久根くんはジブんにやるわ、そんかし人吉くんくれや、取り換えっこしよーで」

「ふむ、ならば安心しろ鍋島三年生。天才などいない。盾道もな」

天才は居るのよめだかつち、アンタもその内の一人。天才は凡人を挫折させ生きている。凡人は天才に勝つために努力するために生きている……だけど……後者はごく少数派だ。

中には勝てないと分かり努力しない人間も居る、その中に僕は居る。

「……訂正しよう。努力以外に、その根性も認めてやる。普通、九回も叩きつけられたら立ち上がれないもののだが、一寸の虫にも五分の魂が……良いだろう！その往生際の悪さに敬意を表して、もう楽にしてやるう！！めだかさんと盾道さんの足を引っ張る仕事も、今日で終わりだ！人吉くん！！」

「善吉！！」

お、とうとうめだかつちが動き出したか、さて、どうなるかな……？

「いつ如何なる場合においても私は貴様に負けるなどとは言わん！！だから勝って！！！！貴様がいなくなったら私はごく嫌だぞ！困る



「が……っ！」

「ハアハア、文字通りアンタの足も引つ張つてみました。ってところで、何を認めてくれるんですたっけ？阿久根先輩」

「……………」プイツ

あら、あー君がプイツてした……………可愛いじゃないの……………。

「負けを認める！一本取られたよ……………」

あー君が善ちゃんにそう言つと、善ちゃんは満足げに笑つ。

「……………し、信じられへん。阿久根クンに勝つてしもうた……………。いや、それよりも、双手刈りならウチもよく使うけど、人吉クンは、なんであんなにも綺麗に……………！」

「綺麗も汚いもないし、天才も凡人もない。いるのはただの賢明な人間だけだ。私も貴様も何も変わらんよ」

あはは……まあ、どつでもいいや……ちつて、帰らじつと……。

ガシッ！

「……はい？」

「なあ、盾道くん、盾道くんもやってみいへん？」

「……はい？」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

どうしてこうなった……。
なぜ俺があー君と柔道で勝負しないといけないんだよ……めんごく
さい……。

「あ、あの……」

「ん？どつしたのあー君？」

「よろしく願います！」

「いや、なに緊張してるのさ？善ちゃんもやっぴたみたいで遠慮なしに掛かってきて良いよ？それとその男子！俺を見ながら顔を赤らめるな！そこも！そこもそこも！」

何なんだここの部員は！？怖いわ！何これ、男でもオーケーな人がいっぱい過ぎだろうが！！

「鍋島三年生、どうして盾道もやらせるのだ？」

「んー、さっき阿久根クンから「盾道さんはめだかさんよりも強い」って聞いてな。見てみたくなったんよ」

「……そうか」

「実際どうなん？本当なんか？」

「……見てれば分かる……」

「では、行きますー！」

わー、どうしよう、あー君が突っ込んできちゃった……まあ良いか。
このまま任せよう……。

「阿久根から攻めたぞ!？」

「いつも後手に回っていたあの阿久根が!？」

んー、珍しいんだ。でも俺には関係ないしね。うー、それにしても、
柔道着は窮屈だなー、早く終わらせようつと。

「はっ!」

あー君が僕が着ている柔道着の襟をつかみ、そのまま俺を投げる……
でも、俺の勝ちだね。

「決まった!……なっ!？嘘……やる……」

「あれが真実だ……」

「カツ!俺が苦勞して取った一本を、こつと簡単に取られると、正
直凹むぜ……」

「……なんで……投げた阿久根くんが、投げられとるん……」

「……見事ですすね……」

「ごめんね、正直に相手してると勝てないから、やっちゃったてへっ」

そう……僕は投げられた……けど、投げられてない……ゆえに僕はあー君に負けていない。勝った結果だけを生み出した……。

「さっ、これでいいでしょ？鍋島先輩」

「あ、ああ……ありがとうさん……（いや、ありえへんって……矛盾）
川盾道……めだかちゃん以上に異常アブノーマルやわ……」

こうして、何とか善ちゃんは生徒会に残れることになりました。まあ、柔道部員になる善ちゃんも見たかったかな？でもそうしたら生徒会が二人だけになっちゃうからあれだね……。

（翌日）

「それで……どうしてあー君がここに居るの？」

「そつだ！なんでアンタがここに居る！」

「ん？あ、こんにちは、盾道さん！……それと人吉くん。フツ、キミを追い出すのは諦めたが、俺はめだかさんと盾道さん！を諦めたわけではないのでな」

何か生徒会室に着たらパンツ一丁のあー君が居ました。不知火も居ましたが、教育上、目を隠しております。つうかあー君、今俺の名前強調しなかったか？気のせいか？気のせいだよな？

「それに……鍋島先輩にも三行半をつきつけられたのでね……」

そう言っであー君は左腕に着いている腕章、書記の文字を僕達に見せてこう言い放つ。

「本日付で、生徒会執行部書記職に任命された、二年十一組、阿久根高貴だ。よろしく願います！先輩！」

「……ふっ……ふっ……ふっ……ふざけんなあああつ……！」

箱庭学園生徒会執行部、現在四名……。

とにかく、これからこの二人の仲がどうなるのかは、神のみぞ知る
だね……はあ、めだかつちが気苦労……するわけないか……。
まあ、人員不足つつつか、三人じゃ生徒会は成り立たないし、ちょ
うど良かった！
さて、頑張りますかな

第六話 善ちゃん危機一髪！（後書き）

……阿久根君は犠牲になったのだ……

阿久根君の扱いは気にしないで……ああ、それよりも早く名瀬ちゃんを出したい……

名瀬ちゃんみたいなキャラも大好きなのだ、俺

あと……球磨川先輩エ……手まだまだ先やねん……

後不知火も可愛いわ、なにあのちっこい子、可愛すぎる……

……ロリコンじゃないよ？ホントだよ……仮にロリコンでも、ロリコンと言う名のペド野郎だよ……

悪い、正直ふざけ過ぎた……夜中に投稿だからテンションがハイになってるん……んじゃ、お休み

PS：私はロリコンではありません

第七話 人は人にはなれないよ（前書き）

……あふれかえるほどの腐臭……

どうしてこうなった……

とにかく、本編始まります

第七話 人は人にはなれないよ

たばたばたば……。

「……ふむ、これでよし。しっかし、もう結構いっぱいいな感じだなー。そろそろ部屋の外に出しとかねーと」

「へくちっ！……いやー、流石にここまで来ると、花粉も倍増ですなっくしー!!」

生徒会室にはかなりの量の花で埋め尽くされていた。めだかつちが、一つの投書解決に突付き、一輪の花を飾る方針で、一か月経った今もはや生徒会室に入りきらない数に相当していた。

「うえーん、善ちゃーん……鼻がかいーよー……」

「そんなにひどいか？」

「俺の鼻はデリケートなのさっくしゅっ！……」

「会長就任一か月でこの有様か……この分じゃ、学園中をお花畑にするっつーのも、あながち夢物語じゃ……」

コンコン。

その時、生徒会室のドアがノックされ、入ってくる。

「やあ人吉くん、今日も雑務に精が出るね……って……盾道さん！
？どうしたんです涙目で！？こいつに何かされましたか！？」

「グズツ、ああ、違うよ。生徒会室に飾ってる花の花粉でつくしゅ
っ！少しやられちゃってるだけだからつくちゅっ！うえー、鼻痛い
ー（泣）」

そして痒い……痒い痒い鼻が痒い、メガネを中心に鼻が痒い、痒い、
痒い……つうかメガネしてないし。元ネタは顔ですし。

「ところで……何なのその着こなし方は……」

「あ、これですか？これは会長のめだかさんを模範として見習う義
務がある。だから俺もめだかさんのように、胸元を露出する……！」

「……サタンかっけえ！」

「……てめえらって一周回って馬鹿だよね……」

ありえないから、その着こなし方。なんで胸を露出するんだか……
普通が一番。善ちゃんはあるだよ、制服の下にジャージだから、部
類はあー君と同じじゃね？

「それを言ったらお前もだろ」

「僕は普通に着こなしてるよ」

「いや、髪型……」

「ツインテールのどこが悪いのさ？」

「……男でツインテールは無いと思っぞ……」

「ツインテールを馬鹿にするな!!」

バチン！

「いてっ！縛った髪で攻撃するな！！」

「じゃあ何が良いのさ！ポニーテール？オールバック？それとも三つ編み？おだんご？さあ、選ぶんしゃい！！」

「そ、そんなにムキにならなくても……」

「髪は女の命だぞ！」

「お前は女じゃない！男だ！」

「黙らっしゅっくす！くしゅっ！くぎゅっ！！あう……鼻が……」

もうこれは駄目かもしれね……死ぬ、これ絶対死ぬって……。盾さ
んこれ絶対やばいって、だってあれだもんこれ、結構キツイもん。

「と、と……で……めだがっぢおぞくない……」ズビー

「そっいえばそうですね。人吉くん、何か知ってるかい？」

「あー、目安箱に投書があったもんでね、会長自ら投書主を迎えに

行つてるところです。なにぶん、人材不足でしてね。そーゆー厳しい職場ですから。ま、やめたくなったらいつでも言ってください」

「辞めたくなる？フツ、ありえないね！」

「じゃあぼくやめる……じゃあね……」

「お前（盾道さん）は辞めるな（ちゃ駄目です）！」

「鼻が痛いよ……分がっただがらぎょうのせいどがいっしんじょじょしよ……」

「いや、まだめだかちゃんが投書主を連れてきてないし……」

「……じょつどほげんしづいっでべる……」

このままだとガチで死ぬので、保健室行こう。鼻声になってきたし……。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「それでは八代三年生、詳細を聞こうか」

「……………なあ、あれ……………」

「……………なんですが……………」ズビー

ただ今マスクにゴーグルを装備している俺。薬とマスクはもらったけど、目があったから、ゴーグルは何処からか勝手に拝借した。

「……………盾道……………」

「なんだい。めだがつぢ……………」

「……………帰ったほうが良いぞ……………」

「……………善ちゃん、これって解雇ってことかな？」

「いや、大事を取って今日は休めってことじゃ……………」

「でもごで、花のせいだし……………大丈夫だよめだがつぢ……………」ズビー

うん、明日から薬飲んで来れば無問題。<sup>モーマンタイ</sup>大丈夫だ、問題ない。

「……………そうか……………」

「なあ、もういいか？」

「ああ、悪かったな八代三年生。では、改めて詳細を聞こうか」

「つーか、詳細ってほどのことーねーんだけどさ。黒神さん、あなたに手紙の代筆をお願いしてーんだ。選挙ポスターなんかで見たんだけどさ、黒神さんって硬筆でも毛筆でもすげー綺麗な字イ書くじやんよ」

確かにめだかつちの達筆は有名やしねー。まあ、三年生の時に名のある書家に弟子入りしたとか……………。

「あたし、ガキン頃から字が汚いのがコンプレックスでさ！だからあたしの代わりに手紙を書いてほしいんだ、お願い！」

ふうん、なるほどなるほど……………でもこれ、適任なのが一人いますなこれ。

「ふむ、なるほど。分かった、その話、引き受く「まっただめだがっ  
ぢ」「……どうした盾道？」

「今回はあーぐんにまがせでもいいんでない？あーぐんは入ったば  
がりだし、じよぎなんだがら、字もきれいでじよ？」

「お、俺がですか！？」

「ふむ、それもそうだな。阿久根二年生、いや、阿久根書記、貴様  
に初仕事をくれてやろう。貴様に全権を委任する、生徒会書記の実  
力を見せるがよい！」

「お……お任せください！この阿久根高貴、必ずや盾道さんとめだ  
かさんの期待に応えてみせます！」

うんうん、いい心がけだ………だけどね………あー君………。

「どっどっどぼぐにかじづぐのがなっ？」

「あ、すいませんー！」

全く、もはや癖になってないかなこれ？あんまりかきずかれるの良  
い気分がしないんだよね。  
僕はそこまでえらい人間ではないしね。めだかつちしか似合わない  
と思うんだよね。

~~~~~

「……ふーん、確かにこの投書を見る限り、綺麗な字とは言えねー
やな。でも、今はケータイとかあるんだし、そんな気にしなくても
いいのに」

「でもでも、手書きで伝えたい気持ちもあるんじゃないかな？あ、
やっと薬が効いてきた」

「でも盾道、どうして阿久根先輩に頼んだんだ？」

「……ふふふ、善ちゃん、世の中には知らなくても良いことたくさんあるんだよ？」

「……何か訳アリのようだな、盾道」

これは流石に、言えないよね。あー君の為にもさ……。あれは何かの気の迷い、間違いだっただから……。

「気にしないでめだかつち、何もないからさ。問題とか……ね？」

「……分かった、何も聞くまい」

「ありがとう、めだかつち」

↳誰もいない三年三組↳

「ラブレター？」

「そーだよ！書いてほしいのはラブレターだよ！何か文句あんのかよー！」

「いえ、そんな……」

「自分でもわかってんだよ！あたしみたいなガサツな女が、愛だの恋だのちゃんちゃらおかしいってな！それでも！それでも好きになつちやったらしょーがねーじゃん！もうどーしようもねーじゃんよー！」

「……………」

好きになったものは仕方ない……………か……………確かにそうだ……………。俺も、その気持ちは分かる……………。

「駄目だよ、好きになっちゃ……………現実を見ようよ……………今日のは聞かなかった事にするからさ、また明日から普通の友達でいようよ……………ごめんね……………」

唐突に昔の記憶が、言葉が頭に蘇る……………。俺は今でも……………あなたの事が……………。

「……………そうですね……………あなたの言う通りです、八代先輩……………」

「？」

「わかりました！黒神めだかが率いる生徒会執行部書記として！どんな男でも心を動かさずにはいられない最高の名分を仕上げて差し上げます！」

「お、おう、まあ？よろしく頼むぜ」

（生徒会室）

「……………これはなんだい？」

「いえ、めだかさんが不在なので、盾道さんに見せておこうかと……」

「へえ……………ふむふむ……………」

「いやー、大変でした！なにせ女子の気持ちになって男子の恋文を宛てるなど初めての経験だったものですから！しかしその甲斐あって、かなりの名文が仕上がったと自負しています！」

「なるほど……………じゃあ文面もあー君が考えたんだ……………」

「ええ！どうでしょう！これならめだかさんも良いと思うと思います！」

「……………阿久根先輩……………八代先輩が伝えたいことって言葉なの？それとも気持ちなの？どっち？」

「……………え？」

「阿久根先輩の字で、阿久根先輩の文章で、伝わるものって一体なに？」

「え……………でもあの、しかし！代筆してくれというのが依頼なのですから……………」

「思い上がったちゃ駄目だよ？人が人にはなれない……………八代先輩は困ってるんじゃない、願ってるんだよ。問題なんてないのに、問題を作り出してるだけ。阿久根先輩なら気づけると思ってたけど……………阿久根先輩には失望だよ……………」

「なっ……………！？」

「……………って、めだかつちならきつとこ言つよ？あー君じゃあ、僕は少し出てるから、頑張ってね」

僕はあー君にそういつって、廊下に出る……………。

「はあっ……………」

「もう良いのか？」

「うん、ごめんね、無理に席を外してもらっちゃって」

「ふむ、別に気にしていない……それよりも、なんだ、あのセリフは」

「え？めだかつちが言いそうな事を言ってみただけだよ？」

マジで頑張つてめだかつちが言いそうな言葉を並べてみたんだけどな……駄目だったかな？

「いや確かに、あの場合だと私も盾道と同じことを言っただろうな……」

「でしょでしょ？あはは、流石俺！」

「……盾道、無理しているだろう？」

「まっさか！僕が無理してる？あはは、ないない」

そう、無理なんてしてない。これがいつもの僕さ。だから、絶対に無理なんてしてない……。少し……。そう、ほんの少しだけ……。罪悪感があるんだ……。僕は卑怯だから……。

「……そうか、すまなかった。どうやら私の見間違いだったようだ」

「そうだよ んじゃ、僕はもう行くよ」

さて……。あとはあー君がどうするかだね……。まあ、あの言葉で潰れるようなあー君じゃないし。一度や二度の拒絶で諦めるほど、あー君は人間できちやいないしね。さって、今日はもう薬飲んで寝よう。鼻が痛い……。

く再び誰もいない三年三組く

ドザッ！

「え……。なっ何これ!？」

「見ての通りです。あなたの気持ちに相応しい字が書けるよう、これから俺と練習しましょう」

「な……何言つてんだ？あたし、そんなこと頼んでないぜ！？」

「頼まれてもないことを執行してこそその生徒会です。八代先輩……自分の気持ちは自分の字で伝えてこそそのラブレターでしょう」

そう、盾道さんはこう言いたかつたのだろう。自分の気持ちを伝えるのが大切なのに、どうして代わりの人が気持ちを伝えるための文字を書かなくてはならないのか？

伝えたいことがあるのなら、自分の言葉、気持ちで伝えなくてはならない……あの時の俺みたいに……。

「ふざけんなよ！それができるなら最初からそうしてるって！！」

「それができないんだったら、途中からでもそうしろ！汚い字でも気持ちが伝わればいいなどと又ルイセリフを俺は言わん！願いがあるなら、あなたは自ら努力すべきなんだ！！少なくとも俺は、たかが同性程度の障害があっても、好きな相手をあきらめたりはしない！安心してください！あなたがあなたに見合う字を書けるようになるまで！俺がとことん付き合っただげます！！」

「ひっ……はっはい！よろしくお願いします！！」

その後、あー君の個人授業は一週間続き、八代先輩は意中の男子に自筆の手紙を出すに至ったそうだ。

血と汗と、心のこもったそのラブレターの結果は、個人情報保護の観点から、伏せておくとして……。

「うん、終わってみたら、百点満点の仕事ぶりだったねあー君」

「そうだな……見事な手際だよ」

「一体何を評価されているのかわかりません。俺は当然のことをしたまです……」

「……盾道……」

「分かったよ……。まあまあ、そんなこと言わないの。成果をあげたんだから、謙遜しちゃうだめだろ？今回はなんか空気に僕が褒めてあげるよ」

僕はそう言ってあー君の手を握る。

「お疲れ様あ、あー君。頑張ったね」

「~~~~~い、いえっ！ととと、とんでもございません！
！勿体ないお言葉ですっ！！」

まあ……そんな感じで……生徒会長黒神めだかの学園お花畑計画は、
ついに生徒会室の外に進出したのだった……。
あゝ、鼻が痛いよ……これから薬は持つかないかね……。

第七話 人は人にはなれないよ（後書き）

いや、何かまた夜中になってもうた……

ほんとは昨日投稿しようかなとか思ってたんですけど、ニコラジ聴いてて投稿忘れてましたwww

だって赤飯さんの代わりにthatさんが出るとか……何という俺得

まあ、赤飯さんも好きなんですけどね くっそ、ニコライ行きたかった……

でも北海道から大阪や名古屋は無理や、金がない

なのでthatさん作曲のGOLDを何回も聴いてました……ゲロりんむっちゃ良い声やwww

後は最近、96猫さんとVIP店長のコラボ上がりましたね、あれは腹筋崩壊しましたwwwだけど私はスパッツ派です……あのムチムチ感がたまりません……
さて、夜中なんでテンションがあれで、書きたいことがたくさんあるのですが

……最後に一つだけ言うと、thatさんが赤飯さんの質問で、ゴリラの真似をやってくれの時、二回目を頼まれてやった時の

「ううー、赤飯、ゆっくり不幸になれ」

は、今思い出しても爆笑ものwwwwww

では、おやすみなさい

んで、相変わらず、阿久根君は犠牲になったのだ……

第八話 実験に参加？めんどくさいな（前書き）

はい、今回はすんなりと書き終わりました

やったねたえちゃん！

……なんかおい止めろとかの声が聞こえてきた……

では、本編始まります

第八話 実験に参加？めんどくさいな

《矛川盾道君、校内に居ましたらただちに理事長室まで来てくださ
い》

校内に放送が流れる。えっと、何故僕が理事長室に行かなければならないのかな？何か俺やらかしちゃった？うーん、見当もつかないや。

「ケケケ、とうとう理事長が動いたか」

「うー、良くもまあ他人事のように」

「まあ、他人事だしな。でも、お前が居てくれりゃ、結構楽しくないそつだし、俺的には入ってほしいぜ」

「天才爆発しろ」

「いやいや、それ言っちゃてめえもだろっが」

「うちは天才嫌いなんです、天才ファック！」

「ケケケツ！良いから行くだけ行って来い！もしかしたら、十三組サーティの十三人ン・パーティーの奴らが迎えに来たりしてな？」

「もし来たらめんどくさい事になりそうだし、案外うつかり殺しちやいそうだから、僕から行きますか。不本意だけどね。」

こんな所で殺しはめんどいしね……はあ、やれやれ。用があるなら自分が来ればいいのに、全く大人という奴は、どうして来ないのだから。自分は偉いとも？まあ、どうでもいいか。

あ、そうそう、さっき一緒に居たのは風紀委員長の雲仙冥利君だよん。十歳で高校二年生、飛び級高校生なのだ！シヨタだよシヨタ！

（理事長室）

「失礼します」

「こんにちは、矛川盾道君」

「……あ、はい……こんにちはです……」

老人……この人が理事長さんかな？ 実際僕は初めて見るな。入学式には来てなかったらしいし……まあ、良いけど。

「それで？ なんで俺を呼んだんですか？」

「ふむ、早速本題ですか。まあ、それも良いでしょう……。盾道君、あなたに折り入ってお願ひがあります……」

「フラスコ計画のお誘ひですか？」

「知ってましたか。なら話は早いですが、盾道君、あなたも実験に参加してはくれないでしょうか？」

「お断りします。うち、天才嫌いなんですよ。なので、天才を作り出す実験とか糞喰らえです。誘うなら他の人にしてくれませんか？」

天才なんてみんな滅びればいいのに。僕には興味がないよ、天才を作り出すなんて。人間は完璧ではないから好きで好きで嫌いなのに、そんな事したらますます嫌いで嫌いになっちゃうじゃないか。

「それと、僕を監視かなんかしてる人の話なんて聞きたくもありませんし」

「監視では無いんですけどね……」

「んじゃ、素直に姿を見せてくださいよ？あたしはこんな視姦紛いな事はされたくないですし」

「……分かりました……みなさん、姿を現しても結構ですよ」

理事長の許して五人の人が姿を現す。ん、あの王様気取ってる屑野郎が居ないだけましか……。

「……ふうん……やっぱりか……やあ、久々だね、名瀬ちゃん、宗像君、高千穂君。後の二人は知らないからどうでも良いや」

「ひびっ！？」

「やっぱりお前か、矛川。何年ぶりだ？」

「正直、お前がこの学園に来たこと自体は予想できたぜ？」

「やっぱり君はどうしても殺せる気がしないよ、盾道君」

「あっはははwww何これwww名瀬ちゃんの厨二が悪化してるのにちよつと壺つたよwwwそれに宗像君wwwwwかwwwたwwwなwwwどしたの？wwwでも高千穂君は変わってなくてつまないな」

「君達、盾道君と知り合いだったんですか？」

「昔、盾道君から接触してきたんですよ」

「あ、やっぱりお前もそういう口？俺の時もあいつから接触してきたぜ」

「ノーコメント」

うんうん、三人とも変わりなく、そして内の二人が厨二を発症つと……。ありやいや、人間どこで変わるか分からないね。

「所で、その仮面の子と改造人間の子は誰？」

「えっ、どうして私が改造人間だって分かったの？」

「古賀ちゃん、こいつに常識は通用しない、だから聞いても無駄だ」

「へえ、古賀ちゃんって言うのが。古賀ちゃん……古賀ちゃん……
ん、下の名前は？」

「いたみって言うの」

「いたみ……いたみ……じゃあたまちゃんが良いや」

「たまちゃん!？」

「あれ？嫌だった？たまちゃん」

「いや、私二年生だから先輩なんだけど……」

「……すみませんでした……では古賀先輩とお呼びします……」

「いや、あからさまに残念そうな顔しなでくれるかな!？こっちが
悪者みたいじゃん!」

「じゃあたまちゃん、それかたまちゃん先輩で」

「諦めな古賀ちゃん、こいつは絶対折れないから……」

うん、僕は絶対に折れないよ。だってこれは俺の趣味の一つだし。人にあだ名をつける。うん、なかなか楽しいよ。

「ちなみに名瀬ちゃんはなーちゃん。高千穂君はぐっさんはケー君」

「……ぶほっ！」「」

高千穂君と理事長以外が吹いた。なんでだろう？

「ぐっ、ぐっさんwwwwありえなさすぎるwwww」

「だ、駄目wwwwお腹痛いwwwwでも名瀬ちゃんのあだ名もwwww」

「……ぐっさん……ぐっ……」

「高千穂 W W W ドンマイ W W W」

「うるせえ！笑ってんじゃねえ！！」

「所で、その仮面君、名前は？」

「行橋未造ちなみに三年生だから」

「行橋未造……じゃあゆつきーで ゆつきー先輩 うん、良いねこれ。それで、どうして仮面なんて着けてるんだい？」

「そう簡単に僕が話すと思う？」

「んじゃ、顔だけ見せてください」

「……じゃあ、顔だけね……」

そう言ってゆつきー先輩は仮面を取ってくれる……。正直驚いた、えらい可愛い子がそこに居た……。

「……ゆつきー先輩」

「ん？何？」

「お持ち帰りしてもよろしいですか？」

「へっ？」

ヤバい……何この生物……可愛すぎる……男子の制服を着てるから男の子……だよな？流石に不知火以外の女子に抱き着いちゃったらセクハラになっちゃうしね。

「可愛いよ……くそっ……これは不知火一筋が揺れる……まだこの学園にこんな可愛い子が居たなんて……あたしの馬鹿！くっそ……」

「おい、盾道くん、危ない思考から帰ってこーい」

「……はっ……僕は一体何を……あ、なーちゃんおはよう」

「おはようっ、って、なにやらすんだよ」

ひゅっ！

ちよっ！？注射器を投げんな！？ノリで言っただけでしょくに！？
まったく、最近の若者はキレやすいんだから……。

「さて、理事長、私もう生徒会の集まりに行きたいんですけど、行っていいですか？」

「そうですね、どうやら盾道君は実験に参加するつもりもなさそうですし。これ以上何を言っても無駄でしょう。良いですよ」

「わーい では、失礼しまーす あ、そうそう、一応釘刺しとくけど。もし僕の目の前や近くで目立った行動や幼馴染に危害を加えるような事があつたら、てめえら全員殺すから……分かったらやる事選んでね？そいじゃねー」

ボタンっ！

「……あーつくそ、やっぱりあいつの豹変ぶりは気持ち悪い」

「久々にブルっちまったぜ……」

「……やっぱり、彼は殺せないな……」

「な、何なの今の!？」

「……………」

「……矛川盾道君……やっぱり彼はこのフラスコ計画に最も必要な人物の様ですね……………」

でも……彼がフラスコ計画に誘われたと言う情報は、他の十三組の生徒に行くでしょう。その席を狙って彼に襲撃をする者もあらわれるでしょうが……これは明日から、大変ですな……。

〈生徒会室〉

「おつす、遅れました……………って、あれ?誰も居ない?どないして?」

くっそ、少し懐かしい顔ぶれにあったからって、はしゃぎ過ぎた……。あ、もう活動終わっちゃったのかな?

「……………はあ……………あれ?置手紙?めだかつちからかな?」

僕は机に置いてある手紙を手に取り、読むことにした。

「盾道へ、今日の生徒会の執行場所は……美術室……」

何だ、美術室に居るのか……めんどくせー。さっき美術室通ったぞ？何か誰かが叫んでたが……。
まあ、まだ終わって無さそうだし、行く価値はあるよねー。

〈美術室〉

「はあ、着いた着いた」

無駄にこの学校でかいから、行くのに時間が掛かるんだよね。流石マンモス校……。足が痛い……。今日はどうやら不幸らしい……。さて、中につ……。あれ？

「あ、盾道いー」

「不知火、どしたの？」

「いやさ、今日生徒会は美術室で活動してるって聞いて、盾道に会いに来ただけど」

「そうだったのかー。今日は僕、理事長に呼ばれて少し遅くなっちゃったからさ、今来た所。何かあたしに用？」

「お腹減っちゃった」

「そうかい、じゃあ活動終わってから、ご飯食べに行こう？」

「やったー！流石盾道」

うう、やっぱり不知火は可愛い……でもでも、ゆっきー先輩も可愛いし……ああ、神様、あたしはどうすればいいのでせうか？

「それじゃあ、こい！不知火！」

「はいー！」

不知火は可愛らしい返事をしてから、僕の腕に飛び込んでくる。うん、これこれ、この抱き着き感……癒される。さて、中に入るうっつと……。

「失礼しまーす。少し遅れっ……んじゃこりゃ……」

……教室間違ったかな？何かカオス何ですけど……これ……どうしてめだかつちが水着姿で鍋島先輩は……あれは何？んで諫早先輩がピッチ……男二人は海パン……。

「……不知火、どうやら僕は友達を間違ったらしい……」

「ドンマイ盾道……」

「……帰ろっ……」

「じっ……じっ……じっ……これだー……っ……っ……」

「へっ？ちよ……こっち来んな……ってちよっ！？」

「イツツ！ショー！タイムー！」

何かいきなり謎の男子に僕と不知火は強制早着替えをさせられてしまった……えっと……。あゝ、こいつ殺しちゃって良いかな？

不知火がスクール水着なのはわかるけど……どうして俺も着なきやいけないのさ……。

「そのあどけなき横顔！寸胴のようなボディ！未成熟な四肢！そして隣の子は、男子なのに女子顔負けのくびれ！そして女顔でスク水が似合い！さらにそのポニーテール！！これまでのモデルとは較べるべくもない！これこそが芸術だ！！」

「うえーん！こいつ変態だ！キモイー！！」

~~~~~

「……なるほどね、夕原くんは『可能性』という女神を書きかけたわけか」

「めだかさんや先輩方じゃ無理なわけだ。でも、どうして盾道さんも？」

「彼も『可能性』の女神だよ！こんな女子みたいな男子が、将来どうなるのか！」

「……何この女の子……」

不知火のでかいバージョンの隣に、更に女顔になった僕が描かれていた……。それよりも、どうして僕もスク水に着替える必要があったし……。

「んであー君、鼻血拭け変態」

「はっ!?!」

「……………よくわかんないけど、なんだか勝った!」

「いや不知火、誰よりもお前の負けなんだぜ」

〈後日談〉

「というわけで、不知火と盾道はその後、食券五百円分と、多大な辱めと引き換えにモデルをつとめあげて、夕原は無事コンクールに出品できました……って、ねえめだかちゃん、聞こえてる?」

「……………ふん……………盾道は良いとして……………今回は不知火にももっていかれたな……………生徒会長としてふがいない……………」

「……あゝ、これほどまでの自分の女顔を憎んだ事は無いね……いきなり服脱がされて……辱められて」

「大丈夫ですよ盾道さん！似合っていましたっ！」

「……僕、汚れちゃった……死にたい……」

「あ、あはは……一応、夕原からお礼をもらってるんだが……あいつ、描きたくない絵は描かないんだろ？良くできてるじゃねえか、これ見て元気出せ、二人とも」

「……私より不知火と盾道が前にいる！」

（器ちっちゃ！）

今回の被害、僕の精神的何か。体を辱められた……そしてこの湧き上がった憎悪……プライスレス……。

第八話 実験に参加？めんどくさいな（後書き）

鍋島せんぱああああああい！

なんですのんその恰好！うああああ！可愛過ぎんだろっが！くっ  
そ！鍋島先輩……どうしてそんなに可愛いの……

そして未造！可愛いなこのやろう！不知火は言わずもがなです

最後に名瀬ちゃん……可愛いぞ……

可愛いしか言えない作者でした

では、おやすみなさい……

第九話 楽しい楽しい水中運動会 前編 (前書き)

ららららら

やったね！9時に投稿できたよ

ふふふん、男の娘はやはり最高だと思っね

……あ、男の娘、ご存じないのですか？

つうわけで、本編始めます

前後編つうこととで、どつっすか？ゲッゲーロー

## 第九話 楽しい楽しい水中運動会 前編

「キヤアアアア！」

いや、いきなりですまん。ちょっと今絶賛逃走中なのよ。

「避けるな!!」

「じゃあ攻撃してくんな！」

「だが断る!!」

「てめえ使い方間違ってるぞ!!」

くっそ、どうしてこうなった！私はただ普通に学校を徘徊してただけなんだけど……少しよく思い出してみようか。

あいつらは十三組の生徒、私は二日か三日前に理事長に呼び出されてフラスコ計画に誘われた。

だけど丁重にお断りした……でも選ばれたことにより、俺を倒せばフラスコ計画に参加できると思っ込んでいる輩が居る。

ゆえに、僕を狙っている……。

「……はあ、めんどくさい……」

「11のー!」

「素直にやられるー!」

「もしかして、君達俺を倒してフラスコ計画に参加しようって口？  
よつと」

俺は攻撃を避けながら話しかける。

「当たり前だ!」

「俺達は完璧を目指している!ゆえに、フラスコ計画参加は俺達十  
三組の悲願!」

全く、こんな所でそんな事言っただけなのかな?まあ、だから場所を  
変えて、人が居ない場所に逃げただけだね。

「その為にも、お前を倒す!」

「倒せば上から誘いが来る!」

「……はあ、やれやれだぜ……そんな完璧完璧って……てめえら、その口利けないようにしてやるか?」

今日も今日とて生徒会の集まりがある。最近俺は遅れて来てるから、そろそろめだかつちに何か言われそうだ。だから速攻で蹴りを着けよう。

「君達、物語で一番欠かせない物って、一体なんだと思う?」

「はっ?何をいきなり?」

「意味分からねえ事抜かしてんじゃねえぞ!」

「物語で大切なのは、プロローグとエンドとエピローグ……でも、エンドは幾つもあるんだ……ハッピーエンド、バッドエンド、トゥルーエンド、普通のエンド……君達ならどれを選びたい?」

「はっ、そんなの決まってる」

「フラスコ計画に参加できる、ハッピーエンドだろうが!」

その瞬間、二人の十三組の生徒が俺に襲い掛かってくる……。

「決めるのは君達じゃない、僕だ……。『バッドエンド！最悪な終わり』」

物語で大切なのは、一のプロローグに、何通りものエンドに、一つのエピローグ……。でも、一際僕が大好きなのは……。

「バッドエンド……さあ、君達はどんな声で鳴いてくれるのかね」

その瞬間、この周りの風景が一変する……。

「な……何だよ……これ……」

「おい！お前、何をした！」

「何って、君達に今バッドエンドを見せているんですよ……まあ、死にはしませんから安心してください……最悪廃人ですが……ね」

そして、二人組の目の前に、影みたいなものが現れ、迫り来る。

「ひいいい！な、何だよこいつ！？」

「来るな、来るなあああああ！」

「さつてと……行きますか……」

俺はこの空間から出る。生徒会の集まりに遅れてるんだから、急がないと……。

その後……この二人組の十三組の生徒は、恐怖に慄いた顔で倒れており、そのまま救急車で病院に運ばれたそうなの……。

~~~~~  
~~~~~

〈生徒会室〉

「やあやあ！こんちわ！って……何ですのんこれ……」

全く、十三組の二人組を懲らしめてやっとかさ生徒会に来ての第一声が……これはひどい……。机の上で善ちゃんとかあー君が突っ伏し

て死んでいる……。

これは……青酸カリ！？って、バーローwwwwww。

「お、盾道か、すまんが早く席に着いてくれ、仕事を立て込んでいな」

「その前にこの死体片づけないと、めだかつち捕まるよ？しょうがない、先ずはこっちの仕事からやるか 最初は埋め易いように四肢を切断してから首を……」

「「止める(てください)！！」」

「ちっ、生き返りやがった……おはよう二人とも いい夢は見たか少年」

「お前のせいで悪夢に切り替わったよ……」

「え、淫夢だって……」

「どづいつ耳の構造してんだお前は！」

「さつて、仕事しようつと……えつと、部費の件、これも部費の件……」これも、これもこれもこれも」

「無視かよ……」

「……これ、部費の陳情多くね？実力もないのに部費くれ部費くれ……って……何様やねんホンマに……シバいたるかゴラァ！」

「確かにそうですね……でも元柔道部の人間から言わせてもらえば、部費は一円でも多い方がいいですからね。陳情する連中の気持ちはわかりますよ」

「でもこれさ、明らかに部活多すぎでしょ。ボクシング部やダーツ部ならわかるけど……まあ、ボブスレー部も百歩譲ろう、だが山田部や空を飛部、てめえらは駄目だ。明らかにおかしいだがjk！」

「だが、部として認められてる以上、口出しはできまい。とはいえ、増額できる部費の予算枠は限られておる。全員で分け合えば、雀の涙ほどしか行き渡らん。公平性をかくことになりそうだな」

めだかつちは紅茶を入れながら言う。

まあ確かに、それはそれでしょうがないよね……。

「どうしても言うなら、私が私財を投じてもよいのだが」

「」どうしても止めて！」

めだかつちは自活している。めだかつちは中学一年の頃、当時、数  
学界で最大の難問と言われていたジユグラー定理を難なく解き、そ  
の際の懸賞金を得ているのやで。

そんなふざけた金銭感覚を持つめだかつちは、確かに会計の作業だ  
けでは不向きなのかもしれない。

「……だったらどうです？ ippそ逆に、増額枠をひとつの部の総取  
りにしてしまうというのは？」

ほうほう、それはいい考えかもしれないね。それだったらシンプル  
に、勝ちさえすれば良いのだから。

「俺が担当している業務の中に部活動対抗戦のリレー大会というも  
のがあったでしょう。本来は交流会的なイベントですけど、あれで  
優勝した部が予算増額とか！」

つつかあー君、さりげなく自分の仕事減らす気だね……まあ、汚い  
子

「なるほど、妙案ではある。しかし、リレーは専門競技だ、遊び心抜きでは陸上部が優位にすぎるだろうな」

「だよー、フェアじゃないよねそれは」

「ん？ああ、だったらちようど良いかもしれねえ。後で話そうと思っただけだよ。目安箱にこんな投書があっただ」

何々……黒神めだか様、新設された50メートルプールがあまり活用されていないのがもったいないと思います。

何かあれを使った学校行事を開くことはできませんか？

（一年一組）

「部活動対抗水中運動会？」

「そうなのだよ こないだ完成した無駄な屋内プールがあるやん。次の日曜にそこでイベントを開催して、優勝した部が増額予算総取りって段取りなのよ」

「……また水着か！」

「……ああ、また水着さ……今回は考えた側である生徒会も出るんだけど、今回はちゃんとした海パンだもんね、これで勝つる！」

その時不知火の目が光ったことは、見なかったことにしよう……。

「ふう~~~~ん。ま、陸上部の優位は消えるけど、でも、プールじゃ今度は水系の部活が有利じゃない？」

「その辺はちゃんと考えてるよん 水中パン食い競争とか水中棒倒しとか、泳ぎとはあまり関係ない競技しかやらないつもりだよ」

「ふつ~~~~ん」

「……あ、やっぱり言いたいことあるよね」

「なんだ、盾道も分かってるじゃん。なんでお嬢様とかに意見しなかったの？」

「だって、あの金に目がくらんだ痛い異名の三人の事なんて話したくもないよ」

「まあね、箱庭学園の競泳部には、金にうるさい三匹のトビウオが

いるからね!」

「そうなんだよね。三人とも特待生で実力は折り紙つきだけど、とにかく金の亡者で、賞金つきのレースにしか出場しない変な部員で、お金で雇われたら他校の選手で大会に出たりとか。八百長なんて当たり前で、独自に賭けレースを運営してるって話も」

「ま、精々用心しとけば?あのお嬢様は無敵であっても、決して不敗じゃあないんだからさ。盾道みたいに」

「あーうー、気苦労が絶えないよ……不知火ー抱きしめさせてー、せめて不知火分を補給したい」

「じゃあ、ご飯」

「じゃあ後で焼き肉でもどう?」

「行く行く!!」

それからすぐに日曜日になり、イベントはすんなりと行われた。

『さあ貴様達!戦争の時間だ!働かざる者食うべからずと言つ!』

れは真理に反している！私達はむしろ、こつこつ言つべきなのだ！働いた者は食つてもよい！貴様達、欲しい部費モは勝つて得よ！』

うん、めだかつちらしい言葉だ……だが……だが……！

『ん？盾道、どうしてそんな所に隠れておる？早く出てこい』

「~~~~~！この馬鹿野郎が！出てこれるわけねえだろうが  
「！」

「~~~~~兄貴~~~~~！」「~~~~~」

「コールすんな！」

『良いから出てこい！善吉！』

「はいはい……」

「うわっ！止めて！善ちゃん！いやっ！獣！いやっ、いやあああ  
ああ……！」

善ちゃん、俺の力じゃ、俺が負けるに決まっとるわじく！

「兄貴ー！……なっ……」

「うう〜……どうして……どうしてあたしが……またスク水着なきやなんねーんだよ！……」

『すまん盾道、それしか用意出来なかつた（棒）』

「明らかに棒読みじゃねえかこの野郎！ええい！海パンを所望する！……」

「……あ、姉御……」

「そこ！変えんなや！……」

くそ、二度と着ないと決めたスク水を……どうして私はまた着ているのだろうか……。  
かなり恥ずかしい……。

「盾道クンにおうつとるよ〜！……」

「鍋島先輩まで〜（泣）」

もう嫌だ……家に帰りたいう。つうか、鍋島先輩、あんた引退したんじゃ……。

『えー、それでは協議の説明に移りたいと思います。皆さんにはこれから四つの種目で競ってもらいます。その総合得点で優勝チームを決定します。それぞれの種目の詳細はおいおい説明しますが、先ずは大まかな三点！一つ！代表者三名の三か！今回は皆さんのチームワークを見せていただきたいと言う事で、各部三人一組で参加していただきます』

そうなんだよね〜、だから僕は生徒会執行部ではなくて、どこか部員が足りない補助の役割なんだよね〜、ちえ、ぼっち反対。

『二つ！男子生徒へのハンデ加算！競技は全て男女混合となりますので、男子生徒にはハンデとしてヘルパーを装着していただきます。ここまでは事前に通知した通り、で、肝心の三つ目ですが』

「善吉、そこから先は私が言おう」

「……………どーぞ」

善ちゃんはめだかつちに再びマイクを受け渡す。

『まあ先程は激励の意味で厳しいことを言ってみたものの。しかし、利を得るのが優勝チームだけでは不満のある者もおろう！』参加することに異議がある。『そんな風にも思ってたほしい。貴様達には、今日を楽しんで帰ってほしい。そこで、私は楽しい楽しい愉快なボーナスルールを提案する』

へ？ボーナスルール？そんなの聞いてないよ！？

『この水中運動会には我々生徒会執行部も参加する！生徒会よりも総合得点が高かった部は、その順位に関わらず、私が私財を投じ、無条件で予算を三倍としよう！』

な、なん……だと……まさかあの二人……止められなかったのか！？

『だがしかし、今回のこの行事には私は参加しない。なので、盾道、私の代わりに出れ』

「……はい？」

『その為にスクール水着を着せたのだ。それでは、ここに第一回水

中運動会の開会を宣言する！第一種目は水中玉入れだ！」

ちよつとまてえええええ！今なんつった！？今なんつったああああ  
ああ！この為に俺にスク水を着せただと！？

……許すまずめだかつち……後で覚えとけよ……。つつか俺がめだ  
かつちの代わりに出るのも初耳だし……。

第九話 楽しい楽しい水中運動会 前編 (後書き)

ツイッター始めました、いきなりで申し訳ない

ここにIDって晒してもええんかな？

一応晒しとくんで、ツイッターやってて、尚且つ暇だったら、フォロワーしてやってください

ツイッターID：taisillyou

いやー、出ましたね、新しい異常？過負荷？

まあ説明しましょう

最悪な終わり・バッドエンド

相手に不幸な人生の終わり方や、死に方を強制的に幻覚で見せるもの

もしくはトラウマや、過去に起こった事件なんかも、その体験者を相手に定め、見せることができる

ってわけですたい。まあ、死に方なんかは盾道が決めてるんで、それがその人間の最後ではないんですけどね

さて、前後編な訳ですが、やっぱり男の娘はスク水かスパッツだよ

……へ？ギルティギアのブリジット？

……存じ上げませんね……（遠い目

さて、では次は後編でお会いしましょう、ばいならー

第十話 楽しい楽しい水中運動会 後編（前書き）

本当は昨日完成させて更新しようかと思ってたんですけど

またもやニコラジに目が行ってしまい……

だって、蛇足さんやゲロりんが出る言ってたから、昨日という日を  
どれほど待ちわびていたか！

そして荒木先生！ジョジョリオン連載頑張ってください！ところで、  
石仮面ってどこで手に入りm（ry

さて、今回長めです、端折るのに失敗しました、端折るの苦手です

では、本編をどうぞ

## 第十話 楽しい楽しい水中運動会 後編

『部活動対抗水中運動会！第一種目、水中玉入れ！でわでわっ！これより開始したいと思います！！ルールは説明しなくてもいいくらいですよ！プールの底に沈めてある格チーム20個ずつのお手玉を！会え威厳時間内にできるだけ多くカゴに投げ入れてください！カゴに入ったお手玉の数がそのまま獲得ポイントとなります！それじゃーみなさま！はりきって参りましょー！おーっと申し遅れまして居！本大会実況は、わたし放送部部长代行阿蘇短冊が！解説は！』

『この世に知らぬことなし！一文字流、不知火半袖ちゃんできーっす』

『がーお送りします！！』

へー、解説は不知火がやるのか、まあ、後でご褒美に何か買ってあげよう。それとあー君。

「ハアハアすんな、キシヨイ」

「orz」

『えー、不知火さんは生徒会執行部所属、盾道さんと大親友という

「ことですが？」

『うんそうだよー、長く深いお付き合い！ま、盾道とついでに人吉のことならあたしに聞いちゃいな！』

『はー！ちなみに、盾道さんとはどういったなれ初めて？』

『エツトネー、中学の時に知り合ったんだけど、その内盾道は一回転校しちゃったんだけど、この四月に奇跡的な再開を果たしたんだー！』

『へー、ロマンチックですねー』

不知火のやつ、また適当な事言ってるな……まあ、いつも通りスルーさせていたどころ。

「ククク！ルールの設定間違ってたんちゃうけ？」

「？あ、鍋島先輩」

「こんな塩素拾いみたいなゲームで邪魔っけな浮き道具つけとったらどーもならんやろ。まずもって沈むことがでけんねんからな！

でも盾道くんはなんでつけてへんの？」

「どつやらあっしは女子としてカウントされとるらしいんですわ…

…」

「……そらドンマイやな……」

「でも、これが妥当なハンデのつもりですよ。それに、鍋島先輩だって、そこらへんを読んで代表選手を女子に固めたくせに」

「ククク！まあ部長こそ引退したけども！ウチは反則王の称号まで捨てたわけやないんでな！」

なんでこの人はここまで堂々と卑怯な真似ができるんだか……まったくもって謎だ……。

「構わん、反則も卑怯も、それが貴様の志なら貫くがよい。な、盾道」

「苦労するのはあたしらなんですけど……つつかめだかつち、出ないのにどうして着替えたし……まあいいや。鍋島先輩、よろしくお願ひします」

「ああ、よろしゅうな」

俺は右手を突き出し、鍋島先輩と握手をする。ん、さて、どうやって料理してやるのかな、こいつら……特に勝利とかには興味ないしな……うん、手を抜くか。

「もちろん盾道、手を抜くとだとかは考えてはおらんだろうな？」

「アハハ、ナニヲオツシャルヤラメダカツチ」

「片言になってるぞ」

うっせーな善ちゃん、後あー君、早く立ち直れや……。

「えー、部費増額を賭けた本大会ですが、まずは第一種目、どう見ますか、解説の不知火さん？」

「んー、玉入れなんてみんな小学校以来だろうから、得意も不得意もないと思うけど、強いて言うならバスケット部とかが強いかにゃー？」

『え？バスケ部ですか？』

『うん、水中だろうが陸上だろうが、玉入れは玉入れだし、結局カゴにボールを入れなきゃ話になんないからねー』

『……………』

『なに？』

『いや、まともなことも喋るんだなーと思って……………』

『まあ、玉入れには玉入れのテクニクがあるんだけど、そんなの知ってる奴はいないだろうし？だから、あたしが注目してるのは、玉入れがどーとかそーいうコトじゃないんだよねー』

『……………えーっと……………あれ？（なんだこのコ、怖いぞ？）あ、あら！そんなことを言ってる間に、もう時間いっぱいですね！みなさん、準備はよろしいでしょうか！位置について、よおおおい！どん！』

その瞬間、一斉にお手玉が投げ入れられる。まあまあ、みんな必死やね、この金の亡者ども目！

「うそ、やっぱヘルパー邪魔でもぐれねえ！」

「馬鹿！足でつかめばいいんだよ！」

「や……これ別にヘルパーなくても……」

「てかプール深すぎ！足ついてないって……！」

「お手玉が水を吸って重いつ……！」

「これじゃうまく投げれねえよ……！」

「ワアアアアアアアア……！」

みんな白熱してるわ……これはある意味修羅場と言つものだね……え？違う？まあ、気にしないけどね。それにしても、凄いなー、マジで必至だねこいつら。まあ、部活やつてへんからよお分からんわ。

『おーっと、早くもプール内はアビキョーカンの様を呈しております……！どう見ます、解説の……！』

『あひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！楽しげ！楽しげ！人間が右往左往して面白ーいっ！ー！』

『……………』

どんまい、不知火はかなり楽しんでいるようだねこれ……。

「ぶはっ！ー！」

「部長！っ！うまくお手玉が拾えません！」

「それに、外れたらまた水の中に沈んじゃいます！」

「あー、部長ちゃう！元部長元部長！（いや……ちゅーかマジで難易度高いでコレ。なめとつたけど、予想以上にハードな競技やん！……こんな生徒会の転注はどないしとんや……）」

「ボゴゴゴゴゴゴ……ボゴゴゴゴゴ……ガボゴボガボ」

「おーい盾道、あんまし遊んでんなよー」

「ゴボボボボボボ……プハアツ！……良い深さ」

「っておおおいつ！！ジブンらなに戦線離脱しとんねん！っつか遊んどんなや！」

「なにつて……ほれ……」

「もう盾道さんが全部入れちゃいましたし」

「はあ？んなアホな……」

そう言つて鍋島先輩は生徒会チームのカゴを見る。そこにはお手玉が全て入っているカゴがあった。

「……………」

「ねっ？」

『せつ、生徒会執行部！いつの間にかすべてのお手玉をカゴの中に入れ、一気に20ポイント獲得だあー！！』



んーっ、やっと第一種目が終わったよ。さてさて、一位は……うん、やっぱり生徒会か……それと同率で競泳部か……。

「へー、競泳部も一位か、しかも同率で……」

「でも、いつの間に？」

「貴様達が気づかれない内にお手玉を全て入れたのと同じで、あやつらも入れたのだ」

めだかつちの視線の先には競泳部の三人、金の亡者でトビウオとか言われているバカ三人が居た。ま、興味ないね。

「え……？あんな奴らいたか？」

「いたよ、いたいた！」

「ありや確か競泳部だ！屋久島、種子島、喜界島！俺見てたけど、男子二人はヘルパーつけたまま潜ってたぜ！」

競泳部……ふうーん、つうことは、結構危ない橋を渡ってるんですなー……ま、どっち道、俺には関係ないし、さっさと終わらせませ

か。  
つて……めだかつち……あんた何やつとつと……。

「貴様達の潜りを見ていたが……どうやら普通の人の潜りとは違う潜りだな？人間の批准は水よりも重い。それでも人が見ずに浮くのは、肺の中に空気が詰まっておるからだ。貴様達は通常、潜水前には肺一杯に空気を吸い込むところを、あえて逆に肺からすべての空気を吐き出して浮き袋を空っぽにそてから潜つたな。絶息による強制潜水！一歩間違えば溺死は現実の危険な行為だ……貴様達は命がいらんのか？」

「命？……そんなのどーでもいーもん、いらねーよ……。俺達は命よりも金が欲しい！若き生徒会長様にゃわかんねーだろーけど、俺達は一円に笑って一円に死ぬのさ！」

わー、どうでもいー、めだかつち、関わらない方がよいよ。何を言っても無駄っぱいから、そうそうに手を引いた方がよいと思うな、私は。

『では、続いて二回戦に参りましょう！第二種目は水中二人三脚で  
ーっすー！』

「さて、次は……善ちゃんとあー君か……」

あの二人、犬猿の仲だからなー、競技中に喧嘩しなければいいけど……十中八九喧嘩するだろうな……はあ、やれやれだわ……。

『増額部費競争！部活動対抗水中運動会！第二回戦！水中二人三脚ですー！この競技モジュールはいたってシンプル！各チーム代表者2名が足を紐でがつちりと結んで、50mプールでかけっこしていただきますー！1位でゴールすれば15ポイント！以下2位は14ポイント、3位は13ポイント……と続きますー！さあ！この競技はどう見ますか、解説の不知火さん？』

『あひゃひゃ 馬鹿馬鹿しくてそこそこ最高 ま ソウダネー これも突き詰めれば水中でやるっただけのスプリント勝負だし？だから普通に考えたら、やっぱり陸上部が強そーじやるんだけども？それでもあたしは、競泳部と生徒会の走りに期待したいね あひゃひゃ』

「どつだ盾道、調子は」

「調子ねー、良いどころか。いきなりこんな変態紛いな格好をさせられて、めだかつちの代わりに出るなんて言われちゃ、驚くよ」

「なーんや盾道クン、二回戦は見学かいな」

「私、運動神経皆無なんで、できることと言ったら仲間の足を引っ

張る程度しかできませんので、鍋島先輩」

「なに言うтонねん、あんな離れ業した奴が、どの口を……それにしても、とんでもない連中が参加したもんやな」

「なんの話だ？」

いやめだかつち、分かったらんかったんかいな……さっきの競泳部三人に決まってるじゃんかそこは……。

「とぼけなさんな、競泳部のトビウオ三人衆やん。ククク！實際厄介やでー、あいつら！ゼニのためならホンマなんでもしよるからな！」

「良い噂はねーですわな、あの三人。結構危ない橋を渡ったりしますし」

「……貴様達は連中の事を知っているのか？」

お、何かめだかつちが食いついてきた……うわー、何かろくなことが起こら無さそうなんだけどこれ……ああ、何事もなく競技が終わりますように！

「んーま、リーダーの屋久島部長とは同じクラスやし？もとより特待生の変人奇人ばっかやけどお、中でも屋久島くんは輪アかかつとるよ。阿久根くんや黒神ちゃん、盾道くんとは違う種類の、あつさり天才ゆう男や」

うち天才言うてませんけど。うちは凡人で通ってる至って普通の生徒ですけど……。

「バタフライから平泳ぎから背泳ぎから短距離から長距離からメドレーからなんでもござれのオールラウンダー。その実力自体は素直に尊敬するけど、何を考えとるかわからへんし、何がしたいんかもわからへんねー」

その時、うちの隣に、競泳部の一人が現れる。

「別にわかってもらおうなんて思っただけよ、あたし達は。でも、何したいかは教えてあげるよ。あたし達はね、札束のプールを作りたいんだ。そこで泳ぐのが、あたし達の夢なのさー！」

札束のプールで泳ぐのが夢……？ぶつ……あひゃひゃひゃ！あははははははは！ひはははははははははははははは！何て滑稽で馬鹿であほで間抜けでくだらなくてちっばけで意味不明で理解不能で小さくて浅はかで愉快で頭悪そうな夢！くっだらねーでやんのwwwwww。

く人吉&高貴く

「いいかい人吉くん。確かにイベント主催者である我々聖七下位がチギってしまうのはよくないけれど、だからといって真剣勝負で手を抜いて良いと言う事にはならないんだよ？」

「ええ、勿論！やるからには全力を尽くしましょう！俺が阿久根先輩にペースを合わせていきますから！」

「そうかそうか！これは人吉くんに対して愚問だったな！俺は出来のいい後輩を持って幸せだよ！」

「こちらこそです！さあ、では例によって生徒会を執行しますか！」

「おうとも！ともすれば個人主義に走りがちな今どきの高校生達に俺達の団結力を見せつけてやろう！」

「うわー、あつちは青春してるよ……似合わねー。絶対あれウソだろ、気持ち悪っ！？何あの二人！キャラ崩壊ってレベルじゃねーぞ！」

『位置について、よおおおおおい……どんっ！……！』



「待たせたな種子島」

「いーえいえいえ！待ってたんじゃなくて、待ちに待ってただけですわ」

「それじゃあ泳ぎますか」

そして競泳部はいきなり……猛スピードで泳ぎだした。

『おっ……っっ、おおおおっとこれはあああっ！……きよ……競泳部！これは！これは絶対にありえません！もう危険とかそういうレベルの問題じゃない！なんと！足をつないだままで泳いでおりますう！……』

……な、なんつう危険な……もうこれは逸脱してるよね。命より金が欲しい……やれやれ、とても見ちゃいられないなこれは……。

『そのまま全チームをごぼう好きにして……！競泳部！そのままゴールイン！15ポイントげつとおおーっ！2位は陸上部！生徒会は後半遅れて3位となりました。ここは団結力の差が出たかあ』

いやいや、団結力とかの問題じゃないでしょう……。これは由々しき事態ですぞ全く……。足結んだまま泳ぐとか、自殺行為だよそれ……。命知らずにも程があんでしよう……。

そして、続く三回戦も、競泳部の独壇場だった。

三回戦『ウナギつかみどり』1匹1ポイント。

各チームより代表者一名参加のこの競技。鍋島先輩でさえ9匹がやっただったのに、競泳部の一年エースの喜界島は、なんとそれを上回る13匹ものウナギを捕まえて、13ポイントをゲットしたのだ。

ちなみに生徒会からは……。ええ、お察しの通り私が出ましたよ……。ウナギなら大丈夫だと思って頑張ってたんだよ……。でも、それが間違いだったんだ……。

「キヤアアアア！ちよっ！？気持ち悪い！足に纏わり付いて来るう！？あ、コラ！そこは巢じゃない！イヤアアア！胸に入ったあああああ！こらそこに居る男子！てめえら何鼻血出しながら見てやがんだ！つつかあー君も混ざってんじゃねえ！」

スキル『動物寄り』発動！盾道の周囲にはかなりの数のウナギが近寄り、盾道の水着の中に入っていた……。でもウナギを入れる壺に入っていないかったので、生徒会執行部、まさかの0ポイント！

三回戦はめだかちゃんが出るはずだったため、もともとは生徒会の独走を防ぐための競技だったのだが……まさかめだかちゃんの代わりに盾道が出るとは……。

「こりゃ、優勝は競泳部で決まりですかね。阿久根先輩、最終競技はなんでしたっけ？」

「生徒会が全競技を決めるのは不公平だからね。最終競技の内容は、実況担当の阿蘇先輩に任せているよ」

「不公平ねえ……不公平っつーなら、競泳部の参加が一番の不公平でしたけどね」

「ヒヤハ！意外と歯ごたえねーなア、生徒会！忘れんなよ！増額分の予算全額と！それから元の予算の3倍だからな！」

「……………金・金・金って……………アンタら、ほかに何かねーんですか？」

「ヒヤハ！何にもねーなあ！この世にあるのは金だけだあーっ！」

うっせえなこいつ……あ、めだかつちだ……。

「哀れなことだ」

まためだかつちは人の後ろでポーズを真似る……本当にそれに何の意味があるのか、1日かけて問いただしたいよ……。

「せ……生徒会長……？」

「貴様達も、かつては目先の利益に惑わされぬ純粋な水泳選手だったに決まっている。想像を絶するほどの重度のトラウマを負い、そのような金の亡者になってしまったとしか考えられん」

久々に来たよ、上から目線善説……まあ、こいつらにどう効くかはあたしにはわからないけど……どーでもいいや……。

「安心しろ！この盾道が、貴様達を改心させ！全財産を慈善団体に寄付させてやる！」

「って、私がやるんかい！そこはめだかつち、あんさんがやる空気やったやないかい！！何やねん、その思わせぶりなセリフは……！」

「全財産……？やってみろ！お前は水の中ではなく、絶望の底に沈めてやるー！」

「だから俺に言つな！このアホンダラアー！」

「……盾道……やってくれないのか？」

うっ……めだかつちが……こんなセコイ方法を取るなんて……くそ、これは絶対ウソ泣きだ……こんなめだかつちのキャラじゃないのに……。

「ええい！わかった！やりやいいんでしょ！？やりや！」

「うむー！」

くっそー……めんどくさい……何故俺がこんなことを……本当はめだかつちの仕事だろうに……ああ、最低最悪で不幸で底辺で……めんどくしゃあ！

『部活動対抗水中運動会！最終競技は水中騎馬戦です！泣いても笑つても、これで優勝チームが決定します！部費増額の権利を手にするのは、果たしてどのクラブになるのでしょうか！！では解説の不知火さん、ルール説明をお願いします！』

『はいはい！この世に知らぬことなし！一文字流、不知火ちゃん  
でーっす！ま、構えなくても普通の騎馬戦だよ、八チマキの奪い合  
い！鉢巻取られたり、騎馬が崩れて水中に落ちたりしても失格です  
！たっだし〜！今のままじゃ下位のチームに望みがなさすぎなので、  
ここでクイズ番組的な救済ルール！集めた八チマキの数ではなく室  
で獲得ポイント決定！上位チームの八チマキほどポイントを高く設  
定します！具体的には現在1位のチームの八チマキは16ポイント  
ですが！最下位チームの八チマキは1ポイントにしかありません！』

『なるほど！つまり、上位チームほど他チームから狙われやすいと  
いうことですね？』

『そういうことー』

「へエ、最後まで盛り上げてくれるね 流石はあたしの親友、考え  
ることが違うね！大好きだぜ不知火ー！」

『イエー！あたしも盾道が大好きー！！』

うん、こういうのを相思相愛って言うのかな。もしくは両想い！こ  
れは後で何か奢ってあげなくてはー！！

「どうします屋久島さん？」

「そうだな……現在俺達が48ポイントで、生徒会が33ポイント。つまり、生徒会は俺達の八チマキを奪えばぴったりトップに躍り出る。対して俺達は、生徒会の9ポイントをゲットすれば、それで2位の陸上部と15ポイント差。仮に陸上部が3位のオーケストラ部を潰しても14ポイントだから、それでほぼ安全圏だ。これは下位にチャンスを与える救済ルールなどではない！競泳部おれたちと生徒会あいつらをぶつけるための挑発ルールだ！」

そうそう、これは不知火が面白そうだからかと思って考えた、競泳部VS生徒会のルール。さて、めんどくさいけど、挑発しとこうかな。あの喜界島って子、まだウダウダ言ってるし。

「なんだい？ここまで来て逃げるんだ？そうつれない事言わないでよ？何の為に私があめだかつちの話を受けたんだか分からないじゃん。さあ、掛かってきな！そうすれば、俺式『金よりも大切なもの教え方講座』開いてやんよ！」

さあ、これでどうだ？それとも押しがまだ足りなかったかニヤ？

「……………ごめんなさい二人とも、さっきの発言は取り消します……………ムカついた！だから、あの男を売り飛ばそう！」

「……………」

「お…………おっ……………」

クツハハハハハハ！ やつとやる気になった！ んじゃ俺は、殺る気で  
逝きますか！！

『それではラストバトル！ 位置について、よおーい……………どんっ！  
』

ガシッ！

コールとともに俺と喜界島は手を取り組み合う。

『おっと早速組み合った！ 生徒会！ そして競泳部！ これは……………互角  
でしょうか不知火さん？』

互角？ ふざけんな、ひ弱な僕がこんなバリバリスポーツマンの女子  
の腕力に勝てるわけがない。結構やせ我慢してこらえてんのよ！

『んー、っーか足場の問題だね。ただの腕力なら…………… ああ、競泳部  
の女子の方が強いね、盾道ひ弱だから。それはそうとして、足場だ

けど、騎馬は二人で組んでるからね、上手に組まないとバランスは相当不安定なんだよ。これに関しちゃ水中とか関係なく、チームワークでは競泳部が一步リードって感じかな」

「うー、やっぱりひ弱なあたしじゃ無理かもね　ま、生き方はつまらないけどね。でもすさまじい人間は好きだよ」

「ハッ！何よ今更、人の事金の亡者呼ばわりしといてさ！」

「間違つてないじゃん？金・金つて……ここまでつまらない人間を見たのは初めてだよ……まあ、人間の屑だね。「命よりも金が欲しい」……ああ、つまらない。俺は人間が好きだ、愛してる！でも、人間のそういった部分が大嫌いだ、蔑んでいる！まあ、それも含めて人間だからね、仕方ないさ。でも、僕の目の前でその発言は許さない……てめえらは金におぼれている！！」

「黙れ！！あなたなんかは何がわかる！！お金がなかったせいであたしのお父さんは蒸発したぞ！お母さんは働きすぎて体を壊した！屋久島先輩のご家庭はお金がなかったから離散しちゃったし！種子島先輩の養護施設はお金がなくて潰れたぞ！誰がどー考えても！お金は命よりも大切じゃん！あたしは命よりもお金が欲しい！命知らず大いに結構！お金のために死ねたら本望だ！お財布落としたら誰でも悲しむだろうけど、あたし達は死んでも誰も悲しまないよ！」

「うわつと！？」

『おーっ！生徒会矛川盾道！ここで突き落とされたーっ！  
！！騎馬も無残に崩れ！これは勝負あつたーっ！』

(……ふん、八チマキを奪ってないからポイントは加算されないが、まあ、生徒会さえ失格させれば他チームなど敵ではないから同じことか)

「はあ……はあ……はあ……」

「……やれやれ……何を言いだすかと思えば……そんな自分だけが悲劇の主人公みたいなこと言ってさ……たとえ君達が地獄のように不幸でも、そんなことで命を捨てるようなことはしちやいけな」

「……」

いやあ、危なかった。善ちゃんかヘルパーを投げてくれなかったら落ちてたよ さって、どんな刑に処そうかな？

「やれやれ……哀れだなア、お前……本当哀れだわ……抱きしめたくなるくらい哀れだわ……」

『ほ、矛川盾道副会長！水の！上に！立っている！！だつとおおお  
おー！！！！……え、いえ違います！これは！これはああああ！！』

さつきも言ったけど、善ちゃんヘルパーを投げしてくれな来れば俺  
は沈んでいた。まあ、これは善ちゃんのフラインプレイだね

「……確かに、命よりもお金が大事、そう考えてる人間は山ほど居  
るね……君達も、今まで起きた不幸のせいで金の亡者になってしま  
った……ああ、何て悲しいかな、人間は何と愚かな物か！」

「くっ……知つたような口を利くな！恵まれて育つた人間に、何が  
わかる！」

「……はあ……俺の家は多大な借金を抱えて、俺はこの身を売られ  
た……」

「「「！？」」「」

「僕は恵まれてなんかいないよ。とても平凡に生まれて、平凡に育  
つて、平凡に暮らして、平凡に売られた……まあ、どーでもいいん  
だけどね」

まあ、本当は俺が異常過ぎて親が恐れたから、俺は売られたんだけ

どね。この際、自分の生い立ちは使わなきや

「……どーして……そんなことされたのに、そんな風に居られるの……」

「……ん……そだね……金よりも大切な仲間が居るから……じゃダメかな？さつと……もう疲れちゃったし終わらせようつと。ダーイブー！」

俺はヘルパーの上から飛び、喜界島の所に向かう。

「えっ、ちよっ！？」

「一緒に、落ちようぜ！」

そしてそのまま喜界島の腕を取り、そのまま水の中に落ちる。

「落とした財布なんて拾えばいい、けどね、落とした命は拾えないよ？そんな君に『ハッピーエンド最高な終わり』」

少しだけど、君に幸せな終わりって奴を見せてあげるよ。人間にとって幸福は一杯ある。好きな人と添い遂げることや、大切な人を助

けたりとか……まあ、色々あるよね

『おおおおおっ！これは！両者同時に着水だあーっ！！』

『うん、でもその前に、盾道が落ちる前にちゃっかり競泳部のハチマキ奪ってたね』

『え……この場合、どういつ判定になるんでしょうか？』

『どーもこーも！水中に落ちたら失格ってルールなんだから！浮かぶヘルパーの上はまだ水中だし！やえに最後の攻防は有効！！』

あゝ、やっと終わった。さて、これ以後は喜界島を上にあげてっ……。うう、やはり非力な俺には無理かもしれない……。だがしかし、ここは男の意地やねん！

「うぐぐぐ……無理、善ちゃん手伝って〜」

「はあ、はいはう……」

やっぱり駄目でしたーwww。

そして、僕は善ちゃんに任せて、上にあがる。

「ふい〜、いや〜……疲れた……あ、お二方もお疲れ様です」

「……お前は……」

「あ、もうそれ喜界島から聞いてちゃったんで、何も言わないでください。でもま、あんな事言っても、あなた達は生き方を変えることは無いでしょう?」

「あ、当たり前だ! たかが運動会で負けたくらいで、簡単に変わるかよ!」

「別にそれでいいんじゃないですか? こんなちっぽけな学校行事如きで、人の生き方を変える何ぞ思っちゃいけませんよ。つつか、そんな事で変わっても、拍子抜けしちやいますから。ね、めだかつち」

「そうだな。それに、生き様が死に様でないなら、私はそれでよい。金の亡者でなく、金の聖者であればそれでよい。札幌のプール! なんと豪快な夢ではないか! 夢は豪快なほどすばらしい! 私も泳がせてほしいから、ぜひ実現させてくれ! 生きて、その夢を叶えるがよい!」

「よく言うよ。今回は何もしてないくせしてさ! ブーブー!」

「死んで花実が咲くものか！大切な仲間の命は、精々大切にしろだぞ！」

うわー、ガン無視ですかこんにやろつめ……。まあいいや、そろそろ喜界島を幸福な終わりから覚まさせないとな。  
はい、解除つと。

「……………んっ……………屋久島さん……………種子島さん……………」

幸福な終わりの幻覚や夢は、目を覚ましたらすぐに忘れてしまう異常。最悪な終わりや真の終わりや普通の終わりと違い、記憶ではなく感覚として残る異常なのだ。

「あたしとお金……………どっちが大切……………？」

「ハッ！くっくだらねえ！金だ金！金の方が大切に決まってるだろ！」

「その通り、あんな奴らのほざく綺麗事などに惑わされるな」

「……………そうだね……………じゃああたしとお金、どっちが好き？」

その質問が出た瞬間、二人は何も迷うことなく。

「お前!！」

「!！」

そう答える二人。うん、良きかな良きかな。やっぱりこういった所が好きだな。人間は面白いなあ、だからこそ……もっともって人間を嫌いにさせてほしいよ……。

「……うん、そうだね。あたしも二人が好き、お金より好き……」

まあ、今はそこは些末な問題だね……。

ピュピュイッ!

『そしてここでホイッスル!部活動対抗水中運動会!全競技、ここで終了です!優勝は鍋島猫美率いる柔道部チーム!おめでとうい致します!』



『こんなにいらんわ』と、鍋島先輩は獲得賞金を適当に分配してしまったそうだ。相変わらずとぼけた先輩やね。

「そんなわけで、先日イベントは成功に終わった。しかし、私が学校行事について私財を投じたことについて批判が多かったのも事実。貴様達が言ってた通り、確かに公私混同はよくない！」

ほお、珍しくめだかつちが限度を知ったぞ。これは良い傾向だね。

「よって、今後はそのようなことのないよう、生徒会にお金の専門家を雇い入れることにした、紹介しよう。これから会計職を任せる喜界島同級生だ！競泳部からのレンタルなので、大切に扱うように！」

「……荒稼ぎに来ました。無駄遣いしてたら売り飛ばしますから、そのつもりで！」

「ふっ、だそうだ。仲良くしてやってくれ」

「やほー、喜界島 よろしくね」

「うん、よろしく」

そんなこんなで、生徒会執行部の人数が増えました。うん、良きかな良きかな。

「ちなみにレンタル料は一日320円！」

「「「驚きのお値段っ！」「」」

ちなみに、水着の件なんだけど……。

「あたしがお嬢様に言ってスク水にしてもらったんだ」

ッと、供述しております……。

第十話 楽しい楽しい水中運動会 後編（後書き）

……秀吉可愛いよ秀吉……

男の娘を好きになるってのはホモに値するのかな？でも秀吉の性別は秀吉だから問題ないし！！

そこ、BASARAかと思ったとか言わない、思っただけでも吐き気が……げげごぼうえ……！

つつか、鍋島先輩の水着姿萌え……可愛わ……はあ、鍋島先輩……

さて、今回はここまで、読んでくださってありがとうございます

第十一話 あまり話したことのない奴と打ち解けたり友達になったりするのには銜

俺的にはメガネなしの喜界島の方が好みです

俺にメガネ属性はない！

あるのは男の娘属性だ！

へっ？いい加減しつこい？

……すんまそーん……

では、本編始まります

第十一話 あまり話したくない奴と打ち解けたり友達になったりするのには銜

「そろそろ、お前ん所の生徒会長さんにちょっかいかけようかと思  
ってんだが……」

「めだかつちに？あはは、みょうちゃんは面白いことを、死に行  
くようなものだよそれは」

「ケケケ、お前が何と言おうと、俺は行くぜ。まあ、可能ならあい  
つを風紀に誘ってみるぞ」

「まあまあ、この子は……まあ、めだかつちは絶対に入らないし、  
君も誘わないと思うから別に良いんだけどね」

「まあ、やってみるさ。それよりも、生徒会にまた一人役員が入っ  
たんだってな」

「情報が早いねみょうちゃんは。でもま、あんなポスター貼ってあ  
るんじゃ、当たり前か……」

「やほー、ただいまみょうちゃんとお話し中 いやー、シヨタっ子は  
可愛いな〜、ちまっこくて癒されるよ。」

「さって、今日も生徒会室に行きますか。どうやら放課後だ」

「お、もうそんな時間か。俺もそろそろ風紀に顔出さないと」

「お互い大変だね」

「まあな、んじゃ、また明日」

そう言っつて僕とみょうちゃんは分かれる。さってとー、今日の投書はなっになら〜と……。

「やつほー、盾道クン。ちょっと顔貸してくんないかなー」

「あら、なーちゃん、どないしたの？」

何故か廊下に名瀬ちゃんが居た。うむ、実に奇怪だ……どうしてここに居るのだろうか……。

「いや、ちょっとばかし俺の実験に付き合ってくれないかなーと」

「いやいやいやいや、断固拒否するよ！そしてどうして俺なのさ！？」

「いや、ただの冗談だ。それよりよ、最近大変じゃねえか？」

「大変？……何が？」

「何がって、他の十三組に襲われたりさ」

「ああ、雑魚どもが最近群がって来てうっとおしいね。それがどうしたんだい？」

「大変ならフラスコ計画に参加すれば楽になるって話に来たんだが……」

「嫌だな、入る気なんて全然起きないよ。つつか、もう片っ端から潰してるし問題ないよ」

「そ、そうか……」

「それだけかい？なら、あたしは生徒会に行くから。んじゃね」

んー、今回は珍しい子と話したぞ……明日雨とか降らなければ良いが……困ったー困ったー……。

〈生徒会室〉

「やほー、こんちゃーって……あら、二人だけなのね……」

「あ、盾道……」

「こんにちは……」

「……わぁお……これはまた、空気が重いこと……」

んー、どうしたのかなコレ……もしかして僕お邪魔なのかな？……そっかー、そうだもんねー、善ちゃんも思春期の男の子だから仕方ないかー……。

「それでは、若い者同士ゆっくりと、お邪魔しましたー……」

「「行くな（かないで）！！」」

……うわー、お、息ぴったり。まさかここまで発展していたとは思わなかったよ……。

「まあ、冗談だけどさ。ところで善ちゃん、めだかつちとあー君は？」

「それが俺にもわかんねーんだよ、全く、どこに行ってるのやら」

「あ、喜界島、隣良い？」

「あ、はい、どうぞ」

「どもども それよりも、どうして善ちゃんはぼろぼろなんだい？」

「そ……それは……」

む、二人が遠い目をして明後日の方向を向きだしたぞ……。何かあるのこれは……。まあ、大方見当はついてるけど……。ね

「まあ、大方善ちゃんがノックもせず生徒会室に入って、そこで着替えていた喜界島の裸か下着姿を見てボコボコのされたんだとは

想像がつくよ」

「なんでそんなピンポイントに想像がつくんだよ!!」

「俺を舐めちゃいかんぜよ、善ちゃん。俺の推理力は58万だぜい!

」!

「どーでもいいわ!!」

キヤアツ!善ちゃんが怒った怒った!

「それより喜界島、生徒会にはもう慣れたかい?」

「い、いえ……まだ……」

「……うん、そのようだね……まあ、気軽に話しかけてくれて良いからね。ね?善<sup>変態</sup>ちゃん」

「ちょっと待て!今善ちゃんと書いて変態って呼んだらろっ!!」

「うっせえぞ!変態」

「俺より阿久根先輩だろ！お前のスク水姿見てハアハア言ってたぞ  
！」

「……善ちゃん……後であー君殺しといて。話はまずそこからだよ  
……」

「殺気、殺気出てますよー、盾道さーん……」

「一度あー君とは腹を割って話し合った方がよさそうだ……あの子は  
いつの間にあんな変態野郎に成り下がってしまったのだろうか（泣）」

「さて、善ちゃん！今日の仕事は！」

「ピンポイントで会計の仕事しかない、以上……」

「……喜界島、ファイト！」

「あ、はい……頑張ります……」

「さてー……何してようかな……これ。めだかつちとあー君は出て

るし、善ちゃんは漫画を読んでるし……髪でもちよつとこうか…  
…。

「ふんふんっ……確かここらへんに……お、あったあった、手鏡と櫛とゴム」

どんな髪型にしようかな……うむ、悩む。ツインかポニーかダ  
ンゴか三つ編みかお下げか……悩む……。

「うん、ポニーで良いか」

仕方ないのでポニーに決めた。簡単だし、何よりこの時間だけだし  
ね。家に帰ったらほどいちゃうし。

「ねえ盾道、ここどうしたら良いかな？」

「あー、ここはこうしたら良いよ。そしてここはこう、おっ。」

「ありがとう」

「うん、良いよ良いよ。それより善ちゃん」

「ん？どうした？」

「少しは喜界島と仲良くしなよ？喜界島、どつやら善ちゃんとも仲良くなりたいみたいだよ？」

「ちよっ、盾道！？」

「へっ？あゝ、それもそうだな……」

「だってさ、喜界島」

「う、ううう……」

あ、少しストレートに言いすぎちゃったかな？でも、こうでもしないと出来そうに無いしな。だって水中運動会終わった後に会計に誘ったの俺だし、友達が欲しいって打ち明けたのは喜界島からだし。俺からはこうすることしかできないからな。

「うん、これで良いこれで良い」

それよりも、暇だな、誰か来ないかな。あたし暇になると眠た

くなっちゃうんだよね〜……ああ、睡魔が……。

ガラッ！

「盾道いー！何か呼ばれた気がしたけど、何〜？」

「不知火〜！」

何というベストタイミング！まさかこのタイミングで不知火が来てくれるとは！俺はついているぞ！！

「ん？おや？おやおや？これはこれは、喜界島選手ありませんか！そーいや生徒会に入ったんだっけ？あたし不知火、よろしくねー！」

「不知火〜、おいで〜」

「は〜い！」

そう言つて、不知火は俺の膝の上に座ってくる。うむ、やはり不知火は可愛いな。暖かくて温いし……。

「盾道いゝ、お腹減った」

「うん、そうだね。それじゃあ生徒会が終わったらご飯食べに行こうか。それまでどうする？ここで待つ？それとも他の教室？」

「んゝ、何か邪魔になりそうだし、他の教室で待ってるよ。それじゃ、またね」

そう言つて不知火は生徒会室から出て行つてしまった。うん、その気遣いもまた可愛いのお、孫を見ている爺さんの心境だ……。

「ホントお前ら仲良いよな」

「あら、嫉妬？だったら善ちゃんに愛情でも注ぎましょつか？」

「いくらお前が女顔でも、やめてくれ」

「まあ酷い。良いもーんだ、喜界島と仲良くしちゃうし。ね？喜界島？」

「え？私!？」

「……そうか、二人とも僕の事嫌いなんだね……よよよよ……」

「だー、もううつせえな！そんなことないってわかってんだろつがお前は……」

「まあ善ちゃんは分かってるけど……喜界島はわからないじゃんか……」

「そんなことないよな？喜界島」

「そ、そうよ！私もそんなこと思ってない！」

「……よっしゃ、ウチはこれでまだ100年は生きられる……」

「んな大げさな……」

「……盾道って意外に面白いんだね。ね、人吉」

「お、よっしゃく呼んでくれたな」

うむむむ、ようやく打ち解けてきな……。いや、それにしても、最初生徒会に誘ったとき、駄目もどだったんだけど了解してくれて良かったよ。

「あ、善ちゃん。読み終わった漫画貸してくれないかな？」

「お、分かった。これで良いか？」

「うん、それで良いよ。あ、ちゃんと手渡しね。投げられるのは好きじゃないから」

「はいはいと……」

うん、これでおk。あんまり物とか投げられて渡されるのは嫌だからね。取り損ねて壊しちゃったりするのも嫌だし。

「ほい、漫がつ！？」

「え……ちよっ！？」

善ちゃんが漫画を手渡してくれた瞬間、善ちゃんはたまたま下に落ちていた空き缶を踏んでしまい、僕の所に転んできた。

ドタン!!

「痛っ!」

「つっ、どうしてこんな所に空き缶が落ちてんだよ……っ……」

「あうう……善ちゃん……顔近いよお……頭痛いし……」

「っわっ……」

善ちゃんが俺に覆いかぶさっている。わあ、これは何とも、傍から見たら善ちゃんが僕を押し倒したみたいに見えるねこれ。

「善ちゃん、早くどいて……重いよ」

「あ、ああ、悪い。今どける」

その時、生徒会室のドアが開く。

「確かに！虫は虫なりに役に立つというか……なっ……！！」

「め、めだかちゃん！？」

「……善吉。まあ、若い内は色々あるだろうが……男に欲情しては駄目だろう……。そして場所を選ぶがよい！それが無理なら鍵ぐら  
いかけよ！」

「めだかさんは何を言ってるんですか！この虫が！早く盾道さんから離れる！！そして羨ましい……くそっ……」

「お前らに言われたくねえし！つつか誤解だあああああ！」

今日も今日とて、箱庭学園生徒会執行部内は平和だ。これはこれで、  
良い学生生活なのかな？うん、これはこれでありだね

ちなみに言界島はこの惨状を見ていて爆笑していたのは秘密だ！

第十一話 あまり話したことのない奴と打ち解けたり友達になったりするのには銜

……俺はいつたい何を書きたかったんだ？

最初は善吉が盾道を押し倒す構図を作っていたのは確かだ……だが  
いかんせん、内容が意味不

んな事よりも、昨日のニコラジ、おもしろかったわwww

花たんかわゆすwwwハアハア……

でも、あwwwwwwしwwwwwwなwwwwwwいwwwwwwわ

さて、次回はとうとう風紀委員が出ますね

いやあ、楽しみだ……

読んでくださいますありがとうございます

## 第十二話 いつかの夢（前書き）

やほー

今回は本編ではなく番外編でございます

別に読まなくても、良いじゃないかな

それはそうと、新作作ってしまった……

……頑張ろう

本編始まります

## 第十二話 いつかの夢

人はどうして生きているのだろうか？その事について、疑問を持ったことはないだろうか？

何かをなす為に生まれたわけでもない、何かがしたかったから生まれたわけじゃない……。

そう、誰かが望んだから生まれた……ただそれだけのこと……。

「生と死は表裏一体、生⇨死だ……生きていても死んでいる人間はいつばい居る……」

矛盾してるけど、実際そういう人間はこの世界にごまんといる。

別にそういった人間が気に食わないとか、そういんじゃない……ただ……そう、生きながら死んでるってどういった気分なんだろうか？

ただの好奇心だ、別に僕は生きながら死にたい訳でもないし、死ぬことに興味があるわけじゃない。

でも、今の僕がそれに値するかもしれないな……生きながら死んでいる……それは心が無いからかもしれない……。

人間とはなんと醜い生き物なのか……それを今痛感させられているよ。

元来人間は、自分の脅威になるもの、または自分にはない力を持った人間を恐れる生き物だ。

一人の場合だと、そいつに逆らうまいとし、媚を諂っているが……同じ奴らが束になると、決まって反逆したり、多数で一人を叩こうとする。

学生に良く見られる虐めだ……それもその一つかもしれない。  
強い者が弱い者を虐めたりする……それはただの優越感に浸りたい  
だけだろう。

俺はお前より強いんだと思いたい、ただの自己満足……。

でも、前者は違う。後者よりもかなり陰湿で、ネチっこくて、ウザ  
くて、めんどくさくて、回りくどくて……言い出したらきりがない。

まあ、何が言いたいかと言うと、小学生ながら、僕は絶賛虐められ  
中なのだよ。

でもま、しょうがないかもしれない……僕は異常だから、この  
生徒とは少し口調や観点が違うのだろう……。  
ましてや、小学二年生……先生からしてみれば、大人びすぎている  
ように見えていたのかもしれない……。

特に頭が良いというわけでも、ずば抜けて運動が得意だとかは無か  
ったが、何故か恐れられていた。

一体俺が何をしたのだろうか？ 答えはNO、何もしていないだ。  
人間は醜い……死ねば良い、反吐が出る……。

「……はあ、これで何回目だよ」

机の中には、落書きで一杯の教科書やノート……。

つたく、教科書やノートもタダじゃねーんだから、考えれ屑どもが。つつか、そこからヘンでクスクス笑ってる屑ども、黙れ……目障りなんだよ……。

普通は教師も気づくだろが、見て見ぬふりをしているのは目に見えていた。

俺にはすべての人間が、ただの影にしか見えなかった。純粹ではない、とてつもない黒く濃い影……。なぜこんなものが見えているのか理解ができなかった。ただ単に人間という生き物に興味が無かったからかもしれない。

とにかく、人間というものがとても疎ましく、そして醜く、何よりも屑な存在だと感じていた。

でも、俺が何を思っている、世界は正常に回っている、動いている。異物を、歯車を抱えながら、絶えず世界は動いている。

「世界は平凡か？」

突然そんな質問が飛んできた。ふと隣を見ると、いつの間にか黒髪の女の子が立っていた。

「平凡だよ、そして醜くもある……」

「ほお、では、未来は退屈か？」

「未来に興味は無い。あるのは何も無い暗闇のただ中だけだよ……  
全人類、誰も未来なぞ知る由もない。自分の未来を知っていたら、  
それだけで未来は退屈だろう」

「それでは、現実はあるか？」

「現実ほど適当な物は無いよ。法律なんて無視してる輩が居るのに、  
それを知りえないで知らず知らずに見逃している、適当過ぎるだろ  
う。それよりも、君は何だい？どうして僕に話しかけたのさ」

「ふむ、ただの何となくだ」

「……なんだいそれ……君は僕が怖くないのか？」

「怖い？どうしてそんなことを言うのだ？」

「……いや、何でもないさ……それじゃね、名も知らない人、僕は  
もう行くよ」

変わった子だった……この学校では初めて見るタイプの子だった……  
…。

彼女は僕と同じ異常者だった……でも、彼女の周りはいつとも笑顔が絶え間なく続く、とても普通の日常だった……。

彼女の名は黒神めだか……成績優秀でスポーツ万能、それでいて可愛い……うん、そうだね、まだ小学生だから、可愛いにカテゴライズされるね。

そんな彼女は、いつも誰かを助けたり、手を差し伸べていた。

俺はそんな彼女の生き方が心底嫌いだ……どうだっていい……彼女もまた、この人間の様な脆弱でちっぽけで、傲慢で歪で黒くて疎ましくて気持ち悪くてむかつく奴らと同じなんだろうと……そう思っていた。

「貴様は何をそんなにつまらない顔をしておるのだ？」

「……また君かい……別に、つまらない顔をしてるわけじゃないよ……ただ、もうどーだって良いって思ってるだけ」

「同じことだと思っが」

「君には関係ないよ……それより、君はあっちに行かなくても良いの？あっちは何だか、君と遊びたい様だよ？」

「ふむ……そんな顔をしておる貴様をほおっておけるほど、私もそこまで薄情ではない」

「はん……強者の台詞だな、それは……。君は何だい？僕を構って「ぼっちの子に話しかけてる私ってカッコイイ」って、そんな優越感に浸りたいのかい？」

「……貴様は何を言っているのだ？私がおんなじな事を思うはずがないだろうが……」

「……君は変わった子だな」

「良く言われるよ」

そんなこんなで、この日を境に、彼女は僕に頻りに話しかけてくるようになった……。

それを見て、周りの生徒は止めた方が良くと説得していたようだが。

「何故話してはならんのだ？」

の、一点張りで……でも、そんな彼女の周りには、いつも人であふれかえっていた……。

つまり……彼女が、黒神めだかが僕の事をどう思っているのか

は分からないけど……かなりうつとおしい……。

「ねえ、僕と話していて面白いかい？」

「面白くなかったら貴様と話してはいけないのか？」

「……はあ……もう良いよ……」

「おい、めだかちゃん！盾道ー！」

それから、また一人、なれなれしくあたしに話しかけてくる輩ができてしまった……。

名前は人吉善吉……普通で普通な人間だ。

「君からも言ってくれ、もう僕に話しかけてくるなど。そして、君も僕に金輪際話しかけてくるな」

「……何で？」

「ああ、もつてめえらは……」

黒神めだかの幼馴染だか何だか知らないけど、やはりこいつもなれなれしい……。うっとおしいし、邪魔だし、めんどくさいし……。この子達はどうして俺なんかを構うのだろうか？こんなちっぽけでくだらなくて、居なくて当然の俺なんか……。

「俺はお前らが嫌いだ、だから話しかけるな」

「私はお前が大好きだ、だから話しかける！」

「めだかちゃんと同じだ！」

「……はあ……めんどくさい……」

最近影がどんどん薄くなってきているような気がする……人間どもに色が戻り始めてきた……。

僕の心境が変わり始めたのだろうか……あの黒神や人吉が構ってくるから……。

でも、やられている事は変わらない……。陰湿な虐めや陰口など……だけど、それも何故か小3に上がった頃にはなくなった……。

あの黒神って奴の仕業だ……それと腰ぎんちやくの人吉も……。

「友達が虐められていたら、助けない訳はないだろう?。」

余計なお世話だつちゅうねん。

「別に、感謝なんてしないからな……黒神」

「それでよい。私は感謝されたくて助けたのではない、友達が困っていたら、助けるのが友達だろう?。」

「ふん……誰が友達なもんか……お節介なやつめ……」

確かに虐めは無くなった……だけど、それで僕の周りに何かできたかと言えば、何もない。

やはり僕の周りには黒神と腰ぎんちゃくの人吉しかいなかった。

「いい加減しつこいね君達二人は」

「まあまあ、良いではないか。一緒に遊ぼう、な、善吉」

「うん! そうだね、めだかちゃん!」

「……はあ……」

それでも世界は回っている……何かが変わっても、変わろうとしても、変わりだしても、変わりだそうとしても……世界は絶えず回っている……。

「それでな……むっ、何がおかしいのだ盾道」

「いや……はははー！」

そう……僕が変わっても、世界は絶えず回っている。

どう変わったとか、何処が変わったとか、僕には分からない。

きっと、黒神や人吉なら気づいてくれるだろう……僕の変った所や、姿など……。

「ふっ……初めて笑ってくれたな。貴様と友達になって、二年……やっと本当の貴様に会えた気がするぞ」

「……うん、そうだね……あたしは笑えるんだ……」

そんな事にも気づかず、ただただ毎日を徒勞に終わらせていた。

別に、救いが欲しかった訳じゃないし、助かりたいなんて微塵も思

っていなかった。

でも、黒神や人吉にで出会ってしまったから、こうなってしまった……。

「盾道、変わったな！」

「黙れ腰ぎんちゃく。ただ黒神の話が少し面白くて笑っただけだ……思い上がるな。俺は友達だなんて思っちゃいない、ただ君達が勝手に僕を構っているだけに過ぎないんだから」

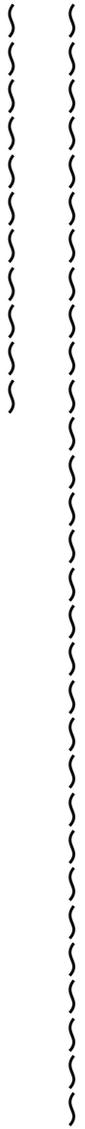
「手厳しいなこれは」

「盾道はツンデレなんだね」

「誰がツンデレだ！」

とてもつまらない世界だけど、これはこれでアリなんじゃないかって、最近想い出した。

黒神に感化されたわけじゃないけど……こうしてみると人間も案外面白い……。



「ん……夢……か……」

どうやら僕は眠ってしまったようだ……。  
変な体勢で寝ていたようだ、体が痛い……。体を伸ばすように、僕は椅子から立ち上がる。

ガラッ！

「だから！フランクフルトはケチャップですって！」

「はっ！これだから虫は！ケチャップマスタードの方が美味しいに決まっている！」

「私はどっちでも好きだけどな」

「貴様達は、くだらないことで……ん？盾道、起きたのか？」

入ってきたのは善ちゃん、あー君、喜界島、めだかつちの四人。  
どうやら四人ともコンビ二帰りらしい……。でも、何故？

「全く、貴様らしくもないな。生徒会の集まりの最中に居眠りとは」

「ああ……そっか……ごめんめだかつち、迷惑かけちゃったね」

「別に迷惑とは思っていない。眠ってしまったてる貴様を、一人で生徒会室に置いていくのも忍びなくてな。こうして待って様と思っていたんだがな……」

「あ、盾道さん！お疲れの様ですが、大丈夫ですか！？なんなら肩おもみしますよ！」

「あ、大丈夫だよあー君、変な気使わなくて良いからさ」

窓の方をちらつと見ると、すでに日が暮れて夜になっていた……。時刻はもう七時だろう……。つうかなんでそんな時間なのに空いているんだろうか……。

「先生に無理を言って、一時間だけ学校を開けてもらつよう言ったんだよ。あまりにも気持ちよく眠ってるから、起こすのが可愛そうだってめだかちゃんか」

「めだかつちが？」

「気にすることは無いぞ盾道。貴様、最近何かしているだろう？」

う、バレてる……。

最近は何の十三組の生徒をあしらっているから、結構疲れがたまっているんだよね……。

まさかここで居眠りしてしまうのは誤算だった……。

「まあ、少しね」

「……口出しはせんが、あまり根は詰めるでないぞ？出来る限りなら私達が手を貸そう」

「ううん、そつちこそ、僕なんか気にしなくても良いよ。大丈夫、これは僕の問題なんだから。それより、何買って来たの？」

そう、君達はいつだってそう……。

僕が嫌いな事ばかりして……だから君達は嫌いなんだ……。

嫌いだ、僕は心底君達が嫌いだ……そして僕は自分も嫌いだ……君達を好きすぎる自分が大嫌いだ……。

「盾道の好きなお菓子買って来たよ」

「ありがとう、喜界島！」

だからこそ……僕は君達の事が嫌い嫌い大好きなんだ……。  
気づいたらいつも僕の隣に居て、気づいたらいつも笑っていて……。

「ほら盾道、金返せ」

「えー、そこは善ちゃんの奢りじゃないのー？」

「この虫が！盾道さんに金を取る気か！」

「いや、そもそも俺の金なんですけどね！」

そうやって……。いつも僕を受け入れて……。  
全く……。君達に出会ってことを後悔してるよ……。穴があったら入  
りたいところだよ……。これは……。やれやれ。

「さて、それではこれを食べ終わってから家に帰るとするか」

さて、また君達の隣で笑ってあげますか。



あちゃー、これ未曾有の重大事故になりそうだ……

さて、もう眠いので、落ちます

今回は番外編ですいませんでした

次は本編をちゃんと書きます

では、読んでくださり、ありがとうございました

お知らせです

どうも、ディアボロです

まさか二週間も空くとは思わなんだ……そして、次の週、明日からの一週間も更新できません……

その次の週、再来週には更新できると思います

理由はですね、委託実習です

どっかの農家に行って、一週間泊りがけで仕事をして来いとの事です……はい、上の権力には逆らえんとです……しかもパソコン持ち込み禁止という……現代っ子でゆとりのあちしにはきちーですはい

それから、先週、先々週と更新できなかったのは、テスト期間+テスト本番があつたからです……

上の権力にw(r)y

そして、そんな途方に暮れている最中にまさかの追い討ち……

声優、川上とも子さんが……亡くなられました……41歳で……悲しい……こんなこと、言いたくないですが……川上さん、闘病生活お疲れ様でした、そして、私達に長きに渡って色んなキャラを見せていただき、また、元気な声を聴かせていただき、ありがとうございます……

自分が初めてアニメで泣けたのは、Airでした……そして、一番笑わせてもらったのはケロロ軍曹でした……あなたが亡くなられても、川上とも子さんは、アニメのキャラと言う一つの作品に、命を一つ一つ吹き込んでいます……それがある限り、私達は決して、貴女の事を忘れたりはいらないでしょう……

本当にお疲れ様でした……そして、ありがとうございます……

……ディアボロでした……

**第十三話 登場、風紀委員会？（前書き）**

やあ、みなさんお久しぶり

ディアボロですぞい

うん、なんで前の週は更新できなかったのか……

それは後書きにて

では、本編始まります

### 第十三話 登場、風紀委員会？

「いい加減観念しろ！」

「ざっけんな！」

あーもう！なんで毎日毎日十三組の生徒に追っかけられなくちゃいけないんだよ！  
もうめんどくさいったらありゃしないよ！！

「はあっはあっ、お前らがいい加減諦めろ！」

「「「嫌だ！！」「」」

「ちよっwwwwww久々にワロタwwwwww」

て、冗談言ってる場合じゃなかった！

もう誰でも良いから助けてくれー！つつか助けやがれー！

「おっ、盾道じゃねーか、何やってんだ？」

「あ、みょうちゃん！ちょうどよかった！後ろの奴らごーにかして  
！」

「あー？はあ、分かったよ」

「げっ、あれは！」

「雲仙冥利！？」

「雲仙冥利って、あのモンスターチャイルドの！？」

さっすがみょうちゃん、恐れられてるよwwwまあ、みょうちゃん  
だし、風紀委員会の委員長だし、しょうがないか。

「しかもあの学園警察の委員長だぞ！」

「やべえ！逃げろ！」

そう言って、十三組の連中は一目散に逃げて行った。ざまあwww  
www

「……なあ、あいつら合法的に殺っちゃっても良いよな……」

「みょうちゃん、抑えて抑えて」

「まあでも、今日だけだからな盾道。つうか、自分で何とか出来るだろ、おめーは」

「いやいや、あたしって極端だから、案外学校崩壊させちゃうかもしれないし。それこそ世界を崩壊しかねないよ」

「さらつと不吉な事を言うなよ……まあ、良いか。んじゃ、俺は戻るぜー」

「はい また明日ねみょうちゃん」

さて、僕は生徒会に顔出さないと。これで通算何度目の遅刻なんだろうかね？

まあ、めだかつちにどやされないだけまだまし何だけどね でも、流石にそろそろウザくなってきちゃったなー、潰そツかな？

まあ、遅かれ早かれ、めだかつちが誘われて、断り、潰しに掛かるのも時間の問題かもしれないけどね。あゝ、ジャンプ読んでえ、確か今週号、ハンターハンター連載再開だっけか（この世界だけで

す)、つつか富樫仕事しろしwwww

生徒会室)

「……………何ですのん、これ……………」

「あ、あはは、盾道……………グッドタイミング……………」

「こんにちはです、盾道さん!」

「うう、力が出ない……………」

「盾道、また遅刻か?全く、しょうがない奴だ」

「ああ、やっとまともな人が来ました(泣)」

えっと、取り敢えず言いたいんだけど……………なんで鬼瀬がこの生徒会室居るんだ?

そして喜界島、何プルプルしてんだ、お前は生まれたての子牛か仔馬か、全く……………。

「鬼瀬、なんで生徒会室に居るの？」

「聞いてくださいよ盾道さん！この生徒会のメンバー！服装がおかしいです！高速に反しています！何なんですか！必要以上に肌を露出してる人も居れば！制服の下にジャージーや水着を着てる人もいますし！この生徒会は何なんですか！」

「あー、耳が痛い……なんでだろう、僕は何もしていないのに、この仕打ち……。」

確かに僕は生徒会執行部においては最近遅刻常習犯ではあるけど、校則は一度たりとも破った事は無いよ……何に自分が言われてるよ……うにかなり耳が痛いよ……。」

「な、なあ盾道、そいつと仲良いのか？」

「まあ、風紀委員会の委員長とは仲が良いし、しょっちゅうって言うて良いほど、風紀委員会には顔を出してるしね。それより鬼瀬、みょうちゃんの仕事に戻ってるし、鬼瀬も今日は風紀委員に戻った方が良いでしょう。皆には僕から言っておくからさ」

「はい……分かりました……。」

僕は鬼瀬を一旦風紀委員会に返す。

全く、鬼瀬も良くやるね。まさかめだかつち達相手に、わざわざ生

徒会室にまで踏み込んできて説教とか……やれやれ、理解しがたいよ……。

それよりも、当面の目的はめだかつちだろうね……あの子、服装は特にうるさいしね……。

「はあ……それで、めだかつち……相手は誰だか分かって反抗してるのかな？」

「むっ？鬼瀬同級生だろう？」

「はあ……鬼瀬は風紀委員会、あの学校警察とか言われてる委員会のメンバーだよ？鬼瀬は、風紀委員長、みょうちゃんが直々にスカウトした子で、風紀のためには暴力も辞さない強引なやり方なんだ。鬼瀬が取締りを行うようになって以来、校則違反は激減したらしいよ」

全く、僕としてはまだみょうちゃんとは仲良くしてたいんだけどね……もちろん、鬼瀬ともだけど……。

「……暴力とは感心しないが、彼女の意見は、まあ正論だ。反論する気にならんよ……」

ほあ、珍しいな。めだかつちが何も言わずに正論と思ってる。まあ、話が話だけに、当たり前っっちゃ当たり前か……。

「ただし、私は自分が間違ってるとも思わない。人がルールを守るべきなのではない、ルールが人を守るべきなのだ」

いや、確かにめだかつちの考えは間違ってるないけど。モラルってものあるし……一応生徒会の会長が校則守らんと、示しがつかないって言うかさ……。

「俺、ちよつと鬼瀬ん所行ってくるわ」

「あ、ちよつ、善ちゃん！……はあ、やれやれ……」

全く、次から次えとめんどくさいな……。これだから……。ああ！何かこのキャラあたしじゃねえし！！何やってんだあたし！

「もうやめやめ！さっさと今日の投書を執行しようぜ！」

とにかく俺は、考えるのを止めた……。

ちなみに言っと、善ちゃんは結局撃沈しちゃったよ

くそれからすぐに〜

何かさ、今古いプールに来てるんだけど……なんで俺まで来なくちゃいけないんだろうね？俺、特にする事無いような気が……。

「例の屋内プールが完成して以来、こちらの古いプールは放置状態だったがゆえに、すっかり雨水がたまってしまっておるな。しかし、さっきの今で私をこんなところに呼び出したのはどういっつもりだ、鬼瀬同級生？言っておくが、子の制服を正す気はまったくくないぞ！」

「え……あ、うん……」

いや、釘を刺さんでもええんやないかな……全く、僕は今回の件については全くの無実無根なのに……。俺が一体何をしたらって言うんだ神様……。

「えー、実はですね、目安箱の投書が何かの手違い！で、ついさっき！風紀委員会に届きまして。それをついっかかり読んでしまったところ、匿名希望！の方が、とても大切な物！を、何故か！このプールに落としてしまったそうで、それ！を探してほしいのです。できる限り早く！見つけないと、水に溶けちゃったり！するかもしれないので、学園を愛する仲間！として！この一刻を争う状況！を、何を置いても黒神さんにお伝えしなければと、義侠心！にかられたのです！！」

（なあ、盾道……鬼瀬ってさ……）

(うん、そうだね……)

(嘘をつくのが下手過ぎる!!)( )

もう、何だよコレ!とんだ茶番じゃないか!全くもー、どうしてこ  
うなったし……。

あ、駄目だ……頭が痛くなっていた……それにめまいもしてきた……  
…なんでだろう……変な汗まで掻いてきた……。

(フッフッフ、完璧!名付けて北風と太陽作戦!または天の羽衣  
作戦!要は、着替えさせようとするのではなく、先ず脱がしま  
えばいいんですよ。底の見えない濁ったプールで作業しようと思  
えば、先ず水着に着替えざるおえないでしょう。そしてあなたがあ  
りもしない落とし物を探してる隙に更衣室に忍び込み、制服を通常の  
デザインのものに取り換える!目安箱をととしての依頼となれば、あ  
なたも立場上断れないでしょう?まあ、騙すように気が引けますけ  
ど(モロに騙してるんですけどね)私としても、出来ればこんな不  
手際をあの委員長に報告したくはありませんし?)

「さあ!私にできることはここまでです!どうなさいますが、黒神  
さん!」

「ふむ、よくわからんが、まあよくわかった……それでは早速、目

安箱への投書に基づき、生徒会を執行する！」

ちよつｗｗｗｗおまつｗｗｗｗｗｗなんでもそのまま入るんだよｗｗｗｗ  
ｗｗねーよ、常識的に考えてｗｗｗｗｗｗ

「な……何をやってるんですか黒神さん！」

「？勿論、探し物だが」

「じゃなくて！服！そんな汚い水に浸かったら、服が駄目になっちゃうじゃないですか！！」

「それがどうした？この一刻を争う状況で、わけのわからないことを言うてない。乱れようが汚れようが、たかが服だろ」

「……………」

ひゅー めだかつちカッコいいー 男気あふれる姉御肌だねー  
まあ、めだかつちにとってはその程度だってことだよ。この子はそういう子だしね。

どんな外装で身を包もうとも、人の中身は変わらない……。

「おっと、そう言えば、その落し物がなんだかまだ聞いてなかったな。鬼瀬同級生、大切なものとは何なのだ？」

「……………」

そう聞かれた鬼瀬は……………そのまま黙って、自分も汚れたプールの中に入ってしまった……………。そして……………こう言った。

「……………私の良心！おかげさまでもう見つかりました」

「……………そうか、水に溶ける前に見つかって良かったな……………」

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「ええええ！黒神さん、スペアの制服七着持ってるんですか！？」

「なんだ貴様、スペアを持っておらんかったのか？では、明日からどうするつもりだったのだ？」

「ど……………ど……………」

「まあ安心しろ鬼瀬同級生。わたしは困ってる者を決して見捨てはしないぞ」

「……………はい？」

↳その会話からの翌日↳

ざわ…………ざわ…………。

そこにはめだかつちの制服を着て、正門の前に立っている鬼瀬の姿があつたそうなの…………。

「盾道一、人間、そのレベルの悪事を働けば、あそこまでの天罰を受けるハメになるわけ？」

「…………聞いて驚け、彼女はめだかつちの制服を騙して着せようとしたんだ…………見てやるな…………」

僕は鬼瀬に聞こえないように、不知火に教える…………、まあ、今回は自業自得って事で、ドンマイ、鬼瀬…………。

「やっぱり不愉快！黒神めだか私に潰します！」

第十三話 登場、風紀委員会？（後書き）

ふいー

久しぶりの更新はきつかったのー

まあ、先ず前の週は何故更新できなかったのか、言い訳を聞いてください

簡単に言いますと、学校が、学際準備期間に入りましたwww

だから、更新が少しできる状態、メンタル、体調ではなかったとです

まだ委託実習が終わってからのダメージが抜けきれなかったのですよ、だから、更新できませんでした

でも、こうして更新できましたので、許してください！

そして……本当に、本当に……ご冥福をお祈りいたします……

川上とも子さん……貴女の事は、一生忘れません……

ありがとうございました……

もうね、川上さん、愛され過ぎ……まだ逝くような人じゃないでしょ、貴女……本当に愛され過ぎですよ……追卓動画見て、最後のAIRの、観鈴がゴールするシーン、あれは本当にヤバかった

もう、泣きじゃくりましたよ……貴女自身がゴールしてどうすんですか……

……本当に、今までありがとうございました……

……読んでくださり、ありがとうございました……

第十四話 ……よし、鍵を捜しに行こう（前書き）

いやー、やっと学際も終わり

ついに夏休みに入る一歩手前まで来ました

早いなー……もう夏休みか

……よし、カラオケに入り浸ってやるぜ

そんなわけで、待たせてしまったすいませんでした

本編始まります

第十四話 ……よし、鍵を捜しに行こう

「~~~~~」

今日の気分は初〇ミ〇 久々のツインでテンションがフォルテッシモな盾道君だよ
でも、今日も今日とて暇なんだ……、悲しいね……不知火はどこにいるか分からないし……。

「ひ〜まひまひまひまひ〜ま〜」

やはり今の学生に必要なのは娯楽なのではないか……そう考えるにはうってつけの日だと、私はおもいま〜すよ。

「何かひつまぶs……じゃなかった、暇つぶしになる物や出来事は無い物かね」

だったら生徒会行けやとか言っちゃだめだぜ？まだ時間外だからこうして校舎ブラブラしてんよ、まあ、あともう少して生徒会始まるのだから……。

「ん？何か前方にいざこざを起こしてる生徒二人をハケーン」

如何しようかな……暇だし、興味本位で見ちゃう？ねえ見ちゃう？
……まあ、あなたも好きものね、仕方ないから見に行きましようか

~~~~~

よう……俺だよ、俺俺……いや、オレオレ詐欺じゃねえよ！

俺だよ！人吉善吉だ！

つつか、今こんな事してる場合じゃねーんだよ……あつ？何かあつたのかつて？カツ！あつたからこうして悩んでんだよ！

「……てめえ……鍵位常備しとけよ！なんで手錠使うのに鍵持ってねーんだよ！？」

「私は刑事や警察みたいに、相手のお縄を頂戴するために使う手錠じゃ無いんです！風紀を乱す連中を更生するために使う手錠なんです！」

「それ手錠の使い方じゃねーから……」

呆れた……はあつ……昨日と良い今日と良い……一体どうしてこんな奴に……はあ……。  
と、その時、後ろから声を掛けられた。

「ありや、善ちゃんも鬼瀬じゃんか……ちえく、なんでく、暇つぶしにはなるかなとか思ってたあたしが馬鹿でしたよ、ブーブー」

「盾道<sup>さん</sup>！」

「むむつ、いかにもタコにも、私が盾道君だよ……つうか二人とも、まさかそんな仲だとは……あたし露知らずに二人に近づいた事を今後悔してるよ！ああ！青春してるね善ちゃん！鬼瀬！それじゃ、お邪魔しましたっ！」

「いや盾道！お前はかなり勘違いをしてるから！」

「そうですよ盾道さん！私がこんな男とデキテル訳ないじゃないですか！！」

「それもそうだね」

「ひでえ（泣）」

「まあ、善ちゃんは置いていて、一体どうしてこうなったんだい？」

「実は……」

「サイドを盾道に戻す」

うん……うん……不知火エ……あんた目、付けられ取るやんか……。今度廊下で食べ歩きしない用に注意しておかねば……。いやはや、まさか、そこまで不知火に手を焼かれてたとは……。まあ可愛いから気にしないけどね

「あい話は分かった。まあ、不知火には後で言っておくよん。でも、結局のところ、手錠の問題が一番難しいぜい？ 鍵を持ってないと言うことは、鞆の中に入れてあるとか、風紀のところに置いてあるとか？」

「あ、はい。この手錠は元々風紀委員の備品ですので、たぶんあると思います。もし無くても、委員長が何とかしてくれると思います」

「そだね、みょうちゃんだったら何とかしてくれそうだもんね。でも、風紀の所まで行くとなると、結構目立つよ？」

「ですよねー……」

「なあ、盾道でも流石にこの手錠は壊せないか？」

「ちよつwwwwあたしにめだかつち同等の怪力で壊せとwwww俺はそこらの一般の女子と筋力同程度ですぞwwwwこの非力少年盾道君を舐めるなwwww」

因みに嘘。やろうと思えば壊せるし、ピッキングもやろうと思えばできる。

でもやらない。何故かって？他人の不幸は蜜の味って言うじゃないか？善ちゃんの困ってる姿を見て、暇を潰しているだけだよwwww

「だよなー」

……うん、ムカツと来た……ムカツと来たけど、流石にキレル訳にはいかないので、抑えた。

やれやれ、最近怒りっぽくなって来ているのだろうか。少しカルシウムを取ろうでは無いか。手始めに煮干しから行ってみよう。

「はあ、しょうがない、んじゃあたしが風紀の教室に行つて、みようちゃんの所に行つて鍵を持ってくるから、二人は適当にこちら辺で暇つぶしときなさいな」

「すみません盾道さん、お手を煩わせてしまつて……」

「うづん、だいじょぶじょぶ、實際暇してたんだよね。まだ生徒会まで時間あったし。んじゃ善ちゃん、鬼瀬の事頼んだよ?」

「ああ、分かったよ」

さて、お使いが始まってしまったねこれ。  
まあ、みょうちゃんだったら話をすれば聞いてくれるし、大丈夫だねー。

（風紀）

「おーいみょうちゃん」

「ん?おお、盾道じゃねーか。どうした?」

「んまあ、ちよつちお使い後をね……。んでさ、鬼瀬が持つてる手錠あるじゃん?あの鍵、持ってたらしない?」

「鍵?.....ああ、確かにあるっちゃあるが.....それがどうした?」

「いやそれがさ、かくかくしかじか」

「ふうくん、不知火がその善吉って奴を鬼瀬に向けて押したら、たまたま鬼瀬が持ってた手錠が二人に着いちまったと」

「……あれ？俺かくかくしかじかしか言ってる気が……」

いやまあ、そこはみょうちゃんだから気にしたら負けだねこれ。つづか敗北しちゃったよ……。

「まあ事情は分かった、ほら、持ってけ」

そういつてみょうちゃんは、何処からか取り出したか分からない手錠の鍵を投げ渡してくれた。

「サンキュウー、みょうちゃん」

「あー。それとき、鬼瀬に俺が軽く怒ってたって言うといてくれ」

「あいよー」

さて、伝言も授かったし、さっさと元の場所に戻りますか。



鬼瀬から訳を聞いて、すぐに鍵を取りに行き、そのまま元の場所も戻ってきてからそんなに時間は経ってないから、そう遠くには行っていない……。答！

まあ、しょせん分からんこつです……。

「はあ、っべー、まじっべーわ……まさか外に出てるって事は無いよな？」

いやー、流石にあんな格好で外に出れるわけないよねー、あはははー……。

……あれ？何か僕、変なフラグ立てちゃった？

一応外の方面も見てみるか……。はあ、やれやれだぜ……。

「それじゃー、レッツ！」

全く、めんどくさいッたらありやしないわねこりゃ。

まあ、引き受けたのはあたしだし、最後までまっとうするとしようじゃないか。

……最近めだかつちに感化されてきたのは否定したいね……。

（そーとー）

「とは息巻いたもの……」

この広い敷地内を全部風漬しに探し回るのは効率が悪いねこりゃ……。

ああもう！何かもうどこでも良くなってきた！！  
もう投げ捨てようかと思ったその時。

バギイイーン！！

……何か変な物音が聞こえたな……何だろう？

……金属が砕ける音？そんな感じの音だねこりゃ……あはは、まっさかー……。

内心そう呟きながら、変な汗を拭う……。

「仕方ない、行ってみますか……」

うん、僕の予想が当たってるなら……たぶんあの子ですぜい……。  
取り敢えず僕は、自分が出せるトップスピードで走り出す……。  
音が聞こえた場所に来ると、そこには手錠を壊しているめだかつちと、善ちゃんと鬼瀬が居た……。

「むっ、どうしたのだ盾道。貴様までこんな所に居て」

「あ……あはは……いや、あの、めだかつち……」

「ん？どうした？」

「取り敢えず……一回僕にアヤマッテ？」

「……すまなかつた」

「……よし、これでスッキリした！」

取り敢えずめだかつちには強制で謝らせた。

さて……後はこの二人の処理だけだよ……。僕は善ちゃんと鬼瀬に目を向けた。

その瞬間二人は脱兎のごとく逃げ出した……ふふふ……全く二人とも……。



オニゴツコハサツキヤツタデシヨ？

〔後日談〕

Nさんの証言

「いやー、あれはもうホンマ……なんちゆうか……な……修羅の如  
き顔やったわ……うん、ホンマ……彼は怒らせたらアカンわこれ……  
……」

Hさんの証言

「いや……ただ純粹に、ごめんなさい……」

Sさんの証言

「いや、あそこまでキレてる盾道見たのも初めてだよ　まあ、あそこに住なくてよかったよ　」

Oさんの証言

「……………」

返事がない、ただの屍の様だ……。

第十四話 ……よし、鍵を捜しに行こう（後書き）

俺は何を書きたかったのだ？

それはそうと、何か更新が不定期なのに、お気に入り登録件数が増えてました！

あざっす！！

さて、次はいよいよ、風紀委員長戦ですね！

どうやって盾道を絡ませようかな？

うっしやガンバる

読んで頂き、ありがとうございました

第十五話 敵対する生徒会（不本意）（前書き）

……やあ、あたしだ

取り敢えず言い訳は後書きにでも載せるよ

本編を始めます

第十五話 敵対する生徒会（不本意）

「……そろそろか……」

「ん？何がそろそろ何だい？」

「ん、いや何。そろそろ黒神の奴に本格的にちよっかい掛けようと思っとな」

あゝ、まだ諦めて無かったんだこの子……。どうやら特攻してすぐに死んでしまいたいらしい……。  
ああ、シヨタ分が……。唯一のシヨタ分が朽ち果ててしまう！？

「みょうちゃんはそんなに死にたがりだったの？」

「おい、サラッと不吉な事言っんじゃねーよ。流石の俺でも、それは無いぞ」

「嘘だ！まあ、それよりも……僕の助言も忘れないでね」

「まあ、肝に銘じとくよ。さて、仕事するかな」

「おつ、これもまた珍し……今回は何の仕事なの」

「あー、何て事のない、ただの騒音元を黙らせるお手軽簡単な仕事だ。ケケケ」

そう言つて、みょうちゃんは教室から出ていく……。

ありゃ、あれは本気で殺る目だったよ……いや、まあ、あれがみょうちゃんの良い所なの……かな？

「さて……暇つぶしに何処が行くかな……」

〈黒神&鬼瀬&不知火サイドi'nオーケストラ部部室〉

オーケストラ部は今、怪我人の山でいっぱいになっている……。楽器の所々には穴が開いており、弦楽器の全ては弦が切れており、フルート等の棒状の楽器は無残にも折れている……。

(え……なに？何ですかこれ……)

そう、鬼瀬は何も知らされていなかったのだ。

ただ、自分が属している委員会の委員長が仕事をしているので、その委員長にタオルを持っていきなさい……そして、その仕事ぶりを

見て、気を引き締めなさい……っと……。

彼女は何も知らされていなかったのだ。故に、驚愕した。

オーケストラ部のドアを開け、その中の惨状など、誰が予想できた  
だろうか……。

そして、更に驚くべきことは……。

（確かに私達風紀委員会は、理事会から条件付き武装を許可されて  
ますけど……一体何を使えばこんなことが出来るんですか！？）

そう、余りにも不可解なのは……風紀委員長……雲仙冥利が……一  
体どんな武装を持ってすれば……こんな惨状になるのかが分からな  
かった……。

「おっ、鬼瀬ちゃんじゃん タオル持ってきてくれたんだ」

「あっ、はっ、はい！」

「ったく……俺は本当に駄目だなー、帰り血まみれなんていつもの  
ことなのに……いっつもタオル忘れちゃうんだよなー」

雲仙冥利は、顔に着いた返り血をタオルで拭きながら話す。

他者の血なぞ浴びてさも同然な発言をしながら……。故に、黒神めだかも驚愕した……。

「で、何。黒神めだか？なんでテメ　がここに居るわけ？」

黒神めだかがここに来たのは、単なる偶然。そう、本当に些細な偶然だったのだ……。

いや……偶然だったのかもしいないけど……それは……本当に偶然だったのか？

黒神めだかは……投書があったため、オーケストラ部に出向いた……だがどうだろうか……その投書通りに、彼女はちゃんとオーケストラ部に出向いたが……そこにはすでに、風紀委員長が居た……。

そう、生徒会と風紀の仕事がバッティングしてしまったのだ……これは本当に偶然だったのか？

雲仙冥利は、そろそろ生徒会長の黒神めだかに手を出そうと考えていた矢先。

このような偶然が起こってしまった……これは本当に偶然なのだろうか？誰かが仕組んだ事なのだろうか？それは誰にも分からない……。

「近くで見ると大迫力の良いオツパイだな。なんなら俺の女にしてやってもいいぜ？」

「……どうやら互いの仕事がバッティングしてしまったようだ……。貴様との初めての対話がこんな形になってしまっただけで、残念だぞ、雲仙二年生」

お互い、真正面に向き合って話を始める。

雲仙冥利はお茶にかけていて、黒神めだかは落ち着いていた。

「この光景の事情はおおよその察しがつくが。しかし、どう見てもやり過ぎだな。ここまでする必要がどこにあった？」

「ケケケ、安心しな。保健室にはあらかじめ連絡済だ」

「………そういふ問題ではない」

「ケケケ！俺の方も、テメーのそのふざけた格好見りゃー察しがつくぜえ？どーせ平和的解決を目論んでたんだろ？話せば分かるとか、事情があるとかそんなトコだろ？」

それが彼女の真骨頂なのだ……。

彼女の人望を持ってすれば、話し合いでの解決なら、朝飯前である……。

だが、目の前の小さい怪物……雲仙冥利は、それを快く思っていない。

なかった。

「甘えんだよ！話して分かるか！事情なんか知るか！ルールを破った奴が罰を受けるのは当たり前だろーが！それをなあなあにボカしちまったら、事情さえあれば許してもらえらつっておんなじことを繰り返すに決まってるだろーがよ！やり過ぎなけりゃ正義じゃねえ！それが俺のポリシーだ！」

(……………そう！私はそのポリシーに賛同して風紀委員会に入った！……でも……………流石にこれは……………やり過ぎ過ぎる！)

そう……………いくら彼がやり過ぎじゃなければ正義じゃないと言っても……………これはやり過ぎだ……………。  
武装を用いて、一般生徒に武力をもって行使するなど……………やり過ぎ以外の何物でもない……………。

「おっ嬢様ー。言うまでもないと思いますけど、このコ、相当ヤバいですよ。お嬢様と同じ十三組の生徒と言えば想像はつくでしょ？この子が仕切るようになって以来、風紀委員会はさらに過激さを増したと言いますからね」

不知火が黒神に小さな声で話す。  
だが、その声が聞こえていたのか、雲仙冥利は普通に話を遮るよう  
に言葉を発する。

「おいおい、そのエアオツパイ！変な噂バラまかねーでくれよ。俺達風紀委員会は、あくまでも平和を愛する正義の軍団だぜ？」

そう言いながら、雲仙冥利はずんずんと前に歩き出す。

「不正を正すことが俺達の唯一の目的だ、暴力も武力もただの手段に過ぎねえ！勿論、黒神！テメーと敵対するつもりも、テメー率いる生徒会執行部と敵対するつもりも」

グンツ！

「ある」

ガツ！

「!？」

その瞬間、雲仙が腕を振る。そして次に起きたことは、黒神の頭にいきなり衝撃が走ったのだ。

(と……飛び道具……？長物？ムチ？全然見えませんでした！でも、

この身長差で……上からの攻撃!?)

鬼瀬は驚愕した。

先ず第一に、雲仙が腕を振るった瞬間、何が飛出し、黒神に攻撃をしたのが全く見えなかった事。

第二に、黒神と雲仙の身長差はかなりあり、どうやっても黒神の上から攻撃何て出来る訳もない。  
だが、この雲仙はやってのけた……。

「……?おかしいな、今のはただの挨拶代わりだけ?見えねーまでも、避けれるくらいの手加減はしたつもりだけど?」

「……貴様に攻撃される理由が無い、故に、避ける理由がない」

黒神はそう言いながら、首をコキコキと鳴らす。その顔は、ダメー  
ジが余り無いのか、それとも皆無なのか……涼しげな顔をしていた。

「……へえ、面白いコト言っじゃん」

スッ。

雲仙は再び腕を振りかざし、攻撃態勢に入る。

「もっぺん同じコト言えたらベタ褒めしてやんよ!!」

そして今度は黒神の下から攻撃を加える。

顎にクリーンヒットし、黒神の頭が上に弾ける。

(今度は下から!しかも……さっきより全然速い!)

「ケケッ」

笑いながら踵を返し、この部屋から出ようと動く。  
だが、その足は……。

「貴様から攻撃される理由がない、ゆえに」

黒神の声によって、ぴたりと止まる。

そして後ろを振り向き、再び黒神を見据える。

「よける理由がない。言っただぞ、褒めるがよい」

「(こりやすげえわ、ありえねー。心身ともに、噂以上のバケモノ  
だぜ、黒神めだか!)……素晴らしい!」

それは黒神の凄みに対しての敬意から出た言葉なのか。それとも、皮肉に意味を込めていったのか分からないが、明らかに苦笑いをしている雲仙。

「やつ、止めてください委員長！黒神さんの言う通りです！今、生徒会と敵対する理由なんか無いじゃないですか！」

「理由ならあるじゃねーか、鬼瀬ちゃん。いつの時代だって、正義は聖者を弾圧するモンだろ？」

「ふざけないでください！これ以上の暴力行為は、一人の風紀委員として見逃せません！」

「ケケ！この俺相手に、ずいぶんと言ってくれるじゃん。好きだぜー俺！鬼瀬ちゃんのそういうトコー！」

真面目に注意をしている鬼瀬とは真逆に、雲仙はお茶らけながら、鬼瀬の言葉を聞いて、返している。

「だけどやつぱり、理由はあんだよ。ここで会ったのはただの偶然だが、ここで会ったが百年目。正義と聖者は相容れねえ、どっちかが潰れるしかねーんだよ。黒神イ、テメーのスタイルって、上から

目線善説とか言われてるらしいじゃん。だったら俺のすたいるは見下し性悪説だ！テメーが花を育てる側なら、俺は芽を摘む側なんだよ！ん！」

「確かに、私と貴様では主義が違うようだが。しかし、それは話し合いで解決できるレベルであろう。敵対する理由は変わらず無いぞ」

「ケケケ、とことん上から目線だな黒神！だっけど、もうそんなレベルじゃねーと俺は思うぜえ？……なんせ、俺は生徒会潰しの為の刺客を四名、既に放っちまってるんだからなあ！！」

「！！」

「テメーみたいな奴にはこういのが一番効くんたる？オラ、もっぺん言ってみな、それが出来たら褒め殺してやんよ！！」

それにしてもこのシヨタ、腹黒である……。

第十五話 敵対する生徒会（不本意）（後書き）

まあ、落ち着いて聞いてほしいんだ

僕は何も悪くない

……訳ないじゃん！！実際かなりわりいよ！

ここで球磨川の言葉使ったら駄目じゃん！

簡潔に言いますと、忙しかったのです

従姉妹が来たり、部活があったり、実習があった……って、これは明日か……

まあ、とにかくこの夏休みは忙しかったのです！

つつわけで、読んでくださり、ありがとうございました

あ、最後に……

真面目に書こうとした結果がこれだよ!!

第十六話 逃げる盾道と、追う者（前書き）

うっは

何や久々やな……

ホンマ堪忍な！ウチやて学生やし、テストに行事、大会が重なれば、そりゃ時間はなくなるうに

なんや、ホンマにすんまへん……

それでは本編始まります

## 第十六話 逃げる盾道と、追う者

前回のあらすじ

作者が何かいきなり真面目に書き出した……あれ、本編と関係なくね？

~~~~~  
~~~~~

「風紀委員会と生徒会執行部の戦争はもう始まってんだよボケ！なんせ俺は既に、生徒会潰しの刺客四人を放ちちゃってんだからなあ！」

「……やれやれ、愚かなことをしてくれたものだ」

「あ？」

「不知火、ここはまかせたぞ」

「はい？」

「今度、私が手ずから満漢全席を振る舞ってやるから。頼むよ」

黒神はそう言っただけで颯爽と駆け出す、だがそれを、雲仙が黙って見過ごすはずもなく。

「あ！？どこ行こうってんだよ黒神！お仲間を助けに行こうってか！？今からこつから間に合うワケねーだろうが！無駄な悪あがきしてんじゃねーよボケ！！」

再び雲仙は腕を振り、高速で黒神に何かをぶち当てる。その軌道はかなり変則で、後ろを向いている黒神は、背中ですれを受けってしまった……だが……。

ポウンッ！

「あり？」

ドアの前には黒神が着てたであろう服が落ちていた。簡単に言くと、変わり身の術と行った所だろうか？

タッタッタッタッタ！

「確かに間に合いそうにはないが、何が無駄なものか。誰かが傷つこうとしている。なのに駆け出さない私の方がよっぽど無駄だ！」

そう言いながら物凄い速さで走っていく黒神。

あまりの速さに、残像が残っているのは当たり前……。

「な……なんだ今の？ 髪の毛の長い女が分身しながらすげー速さで走ってたぜ？」

「いや、あれ生徒会長でしょ？」

「ああなんだ、じゃあ普通だ」

「普通だ」

廊下に居た生徒は口々に普通だと言い、然程驚きはしなかった……  
つつか、いつも分身しながら廊下走ってるのか？  
じゃないと普通だとか認識されないだろう……。……。

〈盾道サイド〉

「いやあ まさかみょうちゃん、僕にまで刺客送るとかwww」

話は聞かせてもらった、さあ、僕と契y……いや、何でもないよ  
それよりも、刺客四人って言ってたよね？

善ちゃん一人でしょ？あーくんで二人目、喜界島で三人目。そし  
て、俺で四人目……の、筈でしたが！

僕には刺客がわんさか居ますwww

ちよつwwwまwwwてwwwやwww

超展開過ぎて冷めた……。

「えっと……これ何て逃走ゲー？」

うちこれ逃げたい……アカン、やり過ぎてまう……。

「と、取りあえず君たち、話し合いで解決出来ないかい？」

『無理！』

「ですよねーwww」

んー、なんであたしだけこんなギャグ補正分高めなのかしらね？あ、

メタ禁止？

固いこと言うなよ、たかが発言だろ？

あ、それがいけないんだろって？……さーせん……。

まあ、なんて言うか、その……。

「逃げるんだよおおおおお！！！」

いや、私ってそんなに喧嘩が強いわけじゃないし。

一対多数は割に合わんて！そんなジャンプ漫画の主人公じゃあるまいし！

どっちかって言うと俺は敵か味方が分からない！謎の人物！ってなのが良いなあ……。

「待て！！！」

風紀委員の一人がそう叫び、それを合図に俺を追いかけてくる……。ええい虫めが！貴様らの口にダイナマイトを放り込んで、少年系の漫画では、それが原因で打ち切りになるようなレベルの、見るも無残なアートの変えてやるうか！！

「でもめんどくさいのでとにかくエスケープなのだよ！！！」

取りあえず、僕のモットーは殺さず生かさずなので、こう言った多人数では、手加減の仕様がないな。

ついやり過ぎちゃっよ。

「しょうがない……君達は僕を『追っている』けど『追っていない』」

仕方ないので、僕を追っかけているけど、意識をそいで僕の顔を忘れさせてしまおう。

もしくは……あれだ、某消える地味な男の子がバスケットでいきなり消えては出るような……なんだっけ？ミスディレクション？  
みたいな感じやね、気にせんという。

「待て〜！」

「んじゃ、バイビー」

俺はどうどうと風紀委員の横を通り抜ける。

うむ、なかなかどうして、こう……爽快感がありますな！  
さて……生徒会室に戻るのかな……。

第十六話 逃げる盾道と、追う者（後書き）

……短いよね……？

んつとねー、これ以上書いてたら、いつ更新出来るか分からなかったんだよね

何か今週の金曜にもまた大会あるしさ

前期と後期の中間の休みでは、何か今年の研究テーマのチーズをその時に作りたいたいから

帰るのは結構遅くなるし、今期の作業だから、精神的に疲れるのは  
必至

だから、短くても更新しちゃえ！って、私の右隣に居る悪魔が囁きました

だが、天使は止めにも入らず、出ませんでした……

あれです、某観察処分者みたいに、悪魔しか出なかったあれです

まあ、そんなこんなで……次はみょうちゃん戦としゃれ込みたいです

そして！球磨ちゃん人気投票一位おめでとー！

皆の裸エプロン美味しかったですwwwwうえっwwwwうえっw  
wwww

つうか、平戸ロイヤル……お前は一体なんなんだ！

本編一回くらいしか出てないだろー！

そして不知火と名瀬ちゃんの裸エプロンは……うん、何も言っな……  
…昇天しまっから……

では、読んでくださり、ありがとうございました

次はちゃんと書きます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7868s/>

---

たとえこの身が矛盾していても.....

2011年9月30日00時47分発行